モントリオールへの道

さまざまな反響をもたらしながら、世界女子選手権アジア予選決勝・日本対イスラエル戦が終った。

本来なら日本が快勝して、一気にオリンピックへの道まで開けたのだから、大声あげて喜びたいのだが今回はどうも、その気になれない。

試合条件の異常さが、誰の胸中にも、重苦しいものを残しているからだろう。

そのなかで、一服の清涼剤ともいえるのは、イスラエル選手のたくましさ、陽気さであった。

遠征の不利、それに加えて厳しい警備の囲い。

第1戦終了後、ケハ主将は報道陣の質問に対して「まるで檻(おり)の中のような毎日。よいコンディションなど望むべくもありません」と厳しい口調で訴えていたが、コートに出てきた彼女たちからは、そうした気配は、ごうも感じられなかった。

イスラエルという国の現況がいっそう彼女たちを〝強く〟しているのかも知れないが、筆者はこの情景を見ながらはたして日本選手にこれだけのヴァイタリティがあるだろうか、と考えさせられたものである。

近年、ハンドボールは地球の一部だけのスポーツから脱して、大きな拡がりを示しその国際性がいっそう高まりつつある。

日本が、この波に乗り遅れるようだと、将来、その道はおのずとせばまれ、やがては閉ざされてしまうことになるだろう。

日本のレベル、特に技術的、戦術水的準の高さは、本場・ヨーロッパでも注目の的だという。

それでいて、なぜ一桁のランクに突入できないのかと云えばチーム全体にも、個々の選手にも、「国際的なたくましさ」が不足しているからだと思う。

どのような条件、環境でもフルに能力を発揮できるようにならなければいけない——ということは「ミュンヘンの道」の時にも、本欄になってからも再三説いてきた。

これは、ナショナルプレイヤーにとって、最低条件であり、必須条件である。

「たくましさの養成」はなにも外国遠征しなくても可能だ。

例えば、トッププレイヤーの揃った実業団は、今年から男女とも選手権をサーキット化(各地転戦)するそうだ。各チーム監督があえて強行日程で旅をつづけ僅かな練習時間で実戦に入るような〝訓練〟を企てでくれるだけでもいいのである。

市民ハンドボールの芽

日本のハンドボール界で王国と呼ばれ、トップゾーンと称されるところを三つあげるとなると愛知、大阪、熊本というのが、まず定評だろう。

この三地区に共通するのは、全日本の覇を争うような強豪をつねにもち優秀選手を数多く輩出している点と、一般市民層へハンドボールがよく侵透している点だ。

前者は、他地区でも秀れた実績を残しているところも多いが後者になると、この三地区の活動が抜群で「強化」「普及」の両輪あいまっている。〝真の王国〟と呼ぶゆえんである。

例えば、熊本の場合を覗いてみよう。

総合選手権と銘打って正月に開く大会は、まさに〝総合〟という名にふさわしい。小学校、中学校、男子3パート、女子と5部門に150チーム近いチームが集る異色のトーナメントで、特に男子Cパートにエントリーする46チーム(50年1月)は、まさに〝市民ハンドボールの粋〟。

言葉をちょっとかえれば、当欄憧れの「草ハンドボール」の集いなのである。

チーム名からして楽しい。「ウルトラマン」「うさぎさん」「リンリン」「ランラン」「友志灯」「役満子」「ガッツ・シューターズ」。

「御船よい子の会クラブ」というのもあるし「わかるまじ打つ」「全日本カトーズ」などと勇ましいのもある。

熊本ハンドボール人の新春あいさつは、ここ数年、この大会の試合場でかわされるのが恒例というが、そこまで定着させた熊本協会の努力はなみたいていではなかったろう。

同協会・藤田八郎理事長に云わせると、市民ハンドボールの芽をのばすのは、「固苦しさをとりのぞくことにある」そうだ。

自由気ままにチームをつくらせ試合させる。

だが、と藤田さんは云う。「大会の運行は、ピシッとする。つまりは全日本選手権なみの組織でのぞむのです」。

にくい〝演出〟である。少年たちが、野球のユニホームに王(巨人)と同じ〝背番号1〟をつけたがるあの心理の利用だ。

市民ハンドボール育成に、地方協会が、次々と新しいアイディアを出しはじめたのは嬉しい。

日本協会が、草ハンドボールに支えられた時、はじめて全日本は金メダルを手にできるといったら極言にすぎるだろうか。(杉山)

「ハンドボール」 50年4月号(第129号)目次

【表紙写真】 世界女子予選アジア予選決勝・日本対イスラエル第2戦終了後、両国選手の表情には全力をつくして戦った満足の笑みが浮かんでいた——【3月2日・東京。撮影フォート・キシモト】

日本協会理事（50・51年度）出揃う

3月29日に理事長選出

日本協会は、昭和50・51年度理事（定数33名以内）の改選を急いでいたが、3月に入ってからの会長（田村正衛氏）推せん理事決定で、その顔ぶれが出揃い、3月29日午後1時から東京・岸記念体育会館で初会合を開く。本誌〆切り（3月24日）時点での理事数は27名である。

同会議で理事長（1名）、常務理事（若干名）が選任され、各専門部の担当（部長）も決まる予定だが前年度執行部担当責任者のうち宮本酉嗣（普及指導）、杉山茂（総務企画）の両理事が会長推せんによる重任を辞退しており、新しいスタッフ編成に注目が集っている。

昭和50・51年度 日本協会理事

～ブロック選出～

石切山稔治（北海道）
森　恭一（東北）
入江　暢一（関東）
志田　省吾（北信越）
栗脇　嶷（東海）
森田　正英（近畿）
猪原　昭（中国）
越智　武（四国）
藤田　八郎（九州）

～加盟団体選出～

中沢　重夫（全日本学連）
田中　秀夫（〃）
嶋田新太郎（全国高体連）
清水　正（〃）
横地　宇吉（全日本実連）
山田　稔（〃）
片瀬喜代次（全日本教職連）
柳井　文治（〃）
富永　劭（全日本自衛隊連）
古庄　昌雄（〃）

～会長推せん～
（14名以内・ABC順）

安藤　純光（法大出）
荒川　清美（日体大出）
泉　正明（神戸大出）
神田　清（日体大出）
光嶋　浩（早大出）
大野　金一（東大出）
滝口　三郎（明大出）
渡辺　慶寿（日体大出）

（注）田村会長は残る6名（以内）の人選は新理事長と協議して決めたいとしており，全国理事会（3月29日）でその旨承認を受ける意向。

50年度予算 組み替え終る

日本協会は、昭和50年度予算（一般会計）編成にあたって、これまでにない苦渋を示し、2月23日の全国代議員会でも3時間に及ぶ議論となり、「組織協力金」（3ランク）の徴収承認にこぎつけたものの、なお大幅な修正（査定）が必要であるとして執行部が一任をうけた（＝本誌前号既報）。

このため、役員交替の空白期を埋める荒川理事長と一部在京常務理事によって再度、予算案の組み替えが行われ、3月10日、別表のようにまとめあがった。

田村会長は、3月29日の全国理事会（東京）へこの新案をかける。

予算総額は二八、一六〇、九〇〇円で、収入予算と同額におさえこんでいるが全国代議員会に提示した第1次査定額から五、〇一六五〇〇円が削減され、1月末に〆切った各部要求総額（約四千万円）からみると三割減という厳しい査定になった。

要求全額を認められた審判部にしても、IHF講習会派遣費（150万円・3人分）のうち75万円は受講者負担が条件とされている。

要求額の約四割減という総務企画部は、本誌既報のようにプレオリンピック（9月、モントリオール、全日本男子派遣）と第6回世界女子選手権（12月、キエフ、第2回東ドイツ交流を含む）の全経費を特別会計とする、としたためのもので、田村会長は「受益者負担」を原則にして、両事業を乗り切ると言明している。

このため、6年近く守られた海外遠征個人負担限度額1人15万円の線が崩されることになり、国庫補助の望めないプレオリンピックの場合、社会人は1人30万円程度の負担となりそう。（編集部注・田村会長は、学生の海外遠征個人負担限度額は従来どおり、1人15万円までにおさえたいとしている。）

「受益者負担」増す？

この「受益者負担」は、男女強化合宿時にも適用が検討されている。

技術部の要求した50年度強化費は六、一七八、〇〇〇円（男＝三一七八、〇〇〇。女＝三〇〇〇万）で、2回の査定により四五〇万とおさえられた。

算出根拠は、1回の合宿経費45万円、男女各5回といわれるが、田村会長は、現在のナショナルプレイヤーの大半が、実業団所属のところから実連・林会長と話しあった結果、強化合宿経費も実業団所属選手に限り、全額「個人負担」を打ち出すよう、意見の一致をみたと伝えられる。

この件は、3月14日東京で開かれた「実業団オーナー会議」にもはかられたようだ。

荒川理事長は、今回の提示を最終編成としたい意向だが、収入予算のうち、かなり不安定な部分があるため、29日の全国理事会ではこの点をめぐって、再び激しい議論となることも予想され、「50年度予算」は、かってない難産となっている。

	予算額（円）	要求額（円）	第1次査定額（円）（昭50. 2. 22）
総額企画部	9,681,900	16,144,400	13,459,400
財務部	280,000	370,000	280,000
編集部	6,980,000	7,390,000	7,180,000
審判部	3,712,000	3,712,000	3,712,000
技術部	5,500,000	8,972,000	6,500,000
普及指導部	1,257,000	3,096,000	1,296,000
中学部	700,000	1,000,000	700,000
3部合同委	50,000	50,000	50,000
	28,160,900円		

昭和50年度日本協会部別予算額（案）

荒川氏、日体協理事に出ず　日本体協の任期満了にともなう役員改選は3月に入って進められ注目の理事は、定数の縮少から新評議員の話しあいで、分野別に候補選出という方法が採られた。その結果、球技分野に属した荒川清美氏（前日体協理事、日本ハンドボール協会理事長）は理事候補からはずれた。

代議員変更　秋田協会は、このほど代議員を由利弘氏から豊島慶男氏（県協会常務理事）に変更、愛媛協会は高橋濤年氏（県協会副会長）に正式決定。

各加盟団体が新人事発表

優秀選手選こうをとりやめ

全国高体連ハンドボール部定例委員会は2月15日、東京・体協に34名の委員が出席（ほかに委任状15）して開かれた。

任期満了にともなう役員改選では、全会一致で徳永陸繁現部長の重任（再選）を決め、副部長についても地区割の原則にしたがった現職の清水正（東）、嶋田新太郎(中)、小袋是郎(西)3氏の重任を決めた。

3副部長のうち清水、嶋田の両氏が日本協会派けん理事、小袋氏が日本協会代議員となることも旧年度同ようにまとまった。

このほかの議決事項として、注目されるのは、これまで日本協会の全面委嘱をうけて選考していた「年度全日本高校優秀選手」について、チームゲームである以上、個人をピックアップして表彰するのは疑問という声が高まり、選考の難しさも手伝うことから、49年度（＝本誌125号参照）をもってこの制度の廃止を決めたことだ。

また、日本協会内における高校界の占める位置の大きさに比べ、主に財政面で、日本協会の高体連に対するカバーが少なすぎるという発言が目立ち、日本協会財政をにらみあわせながら、この面での善処を強く要望することとなった。

なお、今年度の全日本高校選手権は8月2日から山梨県塩山市で開かれるが、申しこみ〆切りは6月25日と発表された。

西会長ら首脳陣留任

全日本学連は、役員の任期満了にともなう改選を主議題とした全国総合役員会を2月2日、東京・体協で行った。

新役員の選任は、会長に西敏郎氏(慶大出)、理事長に中沢重夫氏（芝浦工大出）の重任（注・西会長は八選、中沢理事長は再選）をスムースに決め、西氏が病気加療中のため藤松博氏(名古屋工大出)を当分の間、会長代行のポストにおくことも決めた。

日本協会選出理事も中沢氏と田中秀夫氏(中大出)を引きつづき推すこととしたが、三役ともいうべき技術・審判・普及担当役員は、候補者がいずれも日本協会の主要ポストに在任中のためまとまらず後日に決定をもちこした。

このほか、今秋来日をしているスウェーデンの有力チーム・ルギルンドを、全日本学連として迎えいれるよう、各地学連が前向きに検討することを申し合せた。

新理事長に山田稔氏

全日本実連は3月2日で名古屋で理事会を開き、役員改選の結果、新たに理事長として山田稔氏（49才、大山商会、前日本協会監事）を決めた。

実連は、創立当初から人事の回転が早いのを一つの特色としていたが、泉正明理事長も一期（48・49年度）をつとめただけで、山田氏へバトンタッチしたわけである。

副理事長として横地宇吉（ブラザー工業）岡部正文（日本鋼管）の両氏の留任が決まり、常務理事として福本弘、竹野奉明(ともに大崎電気)、泉正明（日本発条)、池田鉄哉（日本ビクター）、川岡成徳（日新製鋼)、近藤金博（東京重機)、森嶋清明（日本耐酸壜)、村中明郎(湧永薬品)、中浜大輔（大同製鋼)、田中滋章(タヨシ産業)、田付和平(大山商会)、富永劭（自衛隊）の12氏を決めた。

なお、会長は林達夫氏、副会長は渡辺和美氏が引きつづきつとめる。

女子もサーキット化 実連

全日本実連は、今年の全日本実業団選手権（第16回。日本実業団リーグ）について日程作成を進めていたが、このほど試合日と開催地を内定した。

注目されるのは、女子もサーキット（各地転戦）に踏み切ったことで、現在の国内球界における女子実業団の占める位置と実力からみて、実質的には「日本リーグ」といってよい。

参加チームは、男子が三景、三陽商会(ともに東京)、三菱レイヨン大竹、日新製鋼呉(ともに広島)大同製鋼(愛知)、湧永薬品(大阪)本田技研鈴鹿(三重)、大崎電気（埼玉）の8チーム。

女子が東京重機(東京)、日本ビクター(茨城)、立石電機山鹿（熊本)、田村紡（三重)、ブラザー工業(愛知)、日立栃木(栃木)、大崎電気(埼玉)、東北ムネカタ(福島)の8チーム。

［日程(案)］男子＝▽5月31日、名古屋2試合、徳山2▽6月1日、名古屋2、徳山2▽6月7日、東京2、呉2▽6月8日、東京2、呉2▽6月14日、横浜2、京都1岐阜1▽6月15日、横浜2、四日市1、名古屋1▽6月21日、大阪2▽6月22日　大阪2（全28試合）

女子＝▽5月23日、熊本2試合2▽5月24日、熊本2、栃木2▽5月25日、熊本2、栃木2▽5月31日、名古屋2▽6月1日、名古屋2▽6月7日、東京2▽6月8日、東京2▽6月14日、岐阜2、京都2▽6月15日、四日市2名古屋2（全28試合）

合 織 糸 ・ 合 織 混 紡 糸



田村紡績株式会社

社 長 田　村　正　衛

四 日 市 市 東 茂 福 町 10 ― 17
T E L 0593―65―2156（代表）
郵便番号　5 1 2

4月中旬に組み合せ決定
モントリオール男子予選

IHF(国際ハンドボール連盟)は、来年のモントリオールオリンピックの男子・大陸別予選組み合せを4月12、13の両日ドルトムント(西ドイツ)で決定すると発表した。

同大会に出場できるのは、世界チャンピオン・ルーマニアと開催国・カナダのほかヨーロッパ7、アジア、アメリカ、アフリカ各大陸1のあわせて12ケ国に決められており、予選は今秋11月3日以降来春3月7日までに終了することとなっている。

◇

アジアからモントリオールオリンピックを目指すのはミュンヘン時の日本、韓国、イスラエル3国のほか、新たに台湾、インド、クウェートらが確実視されている。朝鮮民主主義人民共和国、ホンコンさらにはシリア、ヨルダンなどがエントリーするかどうかが関心の的。

これら各国がすべて出揃った時には、国際情勢がらみで〝混乱〟も予想され、IHFがどのような組み合せを示すか注目される。

日本協会筋は、ミュンヘン予選(昭46、東京・大阪・名古屋)で採られた〝一堂集結〟はどのような場合も難しいとみており、2ケ国間勝負をつみあげていく、いわゆるトーナメント法式(ナックアウトシステム)で実施されるだろうとの観測を強めている。

JOC、全競技参加の姿勢

JOC(日本オリンピック委員会)は3月12日東京で開いた常任委員会で、モントリオール・オリンピックへの日本選手団派遣について協議した。

13日付東京新聞は、この会合でモントリオール大会には全競技に出場する方針で、基本的な合意があった、と伝えており、具体的には4月に小委員会を設け、今後の作業を進めることとなった。

選手団の決定は、来年5月26日のJOC総会となるようだが、派遣人数の決定は、来年1月とみられる。

どうなる派遣人数 (解説)オリンピックへの出場申しこみはその国のオリンピック委員会以外は手続きできず、例え、予選などに勝って出場資格を得ても、同委が見合すと決めればそれまで。

JOCが、全競技参加の基本方針を打ち出したことで、ハンドボールも資格さえ得ればエントリーが確実となった。

予選に勝ったとして残る問題は〝派遣人数〟だろう。

ミュンヘンの時は、フルエントリー(役員2、選手16)よりはるかに少ない役員1、選手11の配当に留ったため、日本協会は近森克彦選手(当時大崎電気、現三陽商会)を役員兼任とし、選手12名を決定、「ハンドボール法式」と呼ばれる苦肉の策をあみ出して話題をまいた。

IHF(国際ハンドボール連盟)の規程では、モントリオールは男女とも役員2、選手14となっているが、JOCがはたしてフルエントリーを認めてくれるかどうか。国庫補助や、国際実績などがからむため、卒直に云って現時点では悲観材料のほうが多い。

なお、女子は、今冬の世界女子選手権でベストフォアにもれた場合、オリンピック直前の来年7月モントリオールで開かれる「3大陸代表〜1ケ国〜決定戦」にまわることになるが、この場合の措置について、日本協会は、あらかじめJOCと話しあっておく必要があるだろう。 (S)

グラノリエルス(スペイン)が来日
〜熊本と東海地域で全5戦〜

恒例の「新シーズン開幕国際試合」は、本誌既報のとおり、スペインの名門男子「バロンマノ・グラノリエルス」を迎えて、熊本と東海地域で、あわせて5試合が行われる。

ホセ・プラト団長、ミゲル・ロカ監督をはじめホセ・サガリバイ、マリア・パゴアガ、ミグエル・プラトらスペインを代表する巧者を主力とした一行18人は3月29日午後2時20分羽田着のスイス航空機で来日。31日の熊本市商OB戦を皮切りに、4月6日までに5試合を行う。

流れるようなパスプレーと、テクニカルな攻撃に定評あるスペイン球界で、20年間に14回も優勝しているグラノリエルスの試合ぶりは注目されよう。スペインチームの来日は史上初めて。(関連記事本誌前号既報)

【日程】▽第1戦、対熊本市商OB(3月31日17時35分・熊本市体育館)▽第2戦　対大同製鋼(4月2日15時30分・名古屋市体育館)▽第3戦、対岐阜教員(4月3日18時・岐阜県民体育館)▽第4戦　対蒲郡ク(4月5日17時30分・蒲郡市民体育館)▽最終戦　対静岡農高OBク(4月6日15時・静岡県営草薙体育館)▽帰国は4月8日正午・羽田=予定

特集

日本・イスラエル戦をめぐって

～〝開催〟までの経過と混乱～

2月28日、3月2日の両日、日本協会が東京で行った第6回世界女子選手権アジア予選決勝・日本イスラエル戦(2試合)は、イスラエルに対する不隠な動きを警戒して、一般公開せず、報道関係者にさえ、試合当日になって会場、試合開始時間を知らせるという徹底した〝隠密〟運営で行ったため内外に大きな反響をよんだ。

こうした異常事態でのスポーツ試合は、ハンドボール界はもとより、日本スポーツ史上初めてのことだけに、ショックも大きく、第1戦当日、取材に詰めかけた報道関係者は、外国通信社を含め24社92人という多数に及んだ。

全国理事会でも検討

日本協会が、このような計画を最初にもらしたのは、1月26日の全国理事会席上である。

インドが勝つであろうとみていた予選Bゾーンで同国が棄権、イスラエルの決勝進出が決まったことから、90%以上日本との対戦が想定され、治安上の問題が深刻に浮かびあがったのである。

IHF(国際ハンドボール連盟)の指示では、ホーム・アンド・アウエイで2試合を消化することになっていたが、4年前のミュンヘンオリンピック予選以来、アジア各国間で、経済的な理由からこのシステムを当分適用しない申し合せができており、今回も日本またはイスラエルで2試合を引きうけるわけだった。

日本協会は、12月の月例常務理事会で、インドとの顔合せになれば、3月東京で開催すると決め、体育館の交渉も始めていたのだが事態急変となり、全国理事会に日本開催の場合は「イスラエル選手はもとより、観客、一般市民の安全を考え、未公開試合とする」旨の執行部案が示された。

出席の各理事は、事態が流動的であることも手伝って一切を執行部へ一任、99%安全と思いながら1%の不安から「未公開もやむを得まい」とのムードが支配的となっていた。

考えなかったイスラエル遠征

当然のことながら、イスラエルでの2試合も考えられたのだが、田村正衛会長、林達夫副会長ら最高首脳陣が、第5次中東戦争の危機をはらむイスラエルへの乗りこみには強く反対の意向を示し、理事会も異論はなかった。

それから約一ケ月、日本協会はIHFが、イスラエルを韓国でのAゾーンに組み入れようとする動きを横目でみながら、荒川清美理事長、杉山茂総務企画担当常務理事が、各方面の意見を集めて、日本開催の可能性を検討しはじめていた。一方、IHF・渡辺和美アジア選出理事は、韓国がイスラエルの入国に難色を示したことで、はっきり「日本開催」を要請した。

この背景には「IHF首脳も、イスラエル開催は危険が多いとし東京での開催を望んでいる。その場合、ノースペクテーターゲーム(観客不在試合)を当然考えなければならない」(渡辺理事、2月6日)という〝IHF判断〟があった。

このため、渡辺理事自から会場探しに走る一幕もあり、事態は潜行しながら進展をみせていた。

慌てさせたテルアビブ電

イスラエル・オリンピック委員会のグロビンスキー名誉事務総長が所用で東京へ立ち寄ったのもこの頃で、荒川理事長が会談。「日本開催」について意見を交かんした結果、「同氏も「未公開」という条件をふくめて日本側の意向を全面的に了承してくれた」(荒川理事長)のである。

韓国でのAゾーンは、予想どおり日本の順当勝ちに終り(=本誌128号参照)、いよいよ日本×イスラエル戦の開催が確定したのだが、互いにその行動を明きらかにしないこと、というIHFの指示にもかかわらずイスラエル側は、2月22日テルアビブで、「近く東京へ向かう」旨を発表、外電の伝えるところとなった。

日本協会は、準備を進めていたとはいいながら、未確定要素が多く、しかも、荒川理事長は2月20日に韓国から帰京したばかりで、なにひとつ具体化していなかっただけに、この外電はまさに突風に似たものだった。

行くと伝えながらイスラエルはメンバーと到着日時の詳細を知らせてこず、荒川理事長も治安当局と交渉をもつのに肝心なところは〝白紙〟で臨まざるをえないありさまだった。

2月23日は全国代議員会の初会合日。荒川理事長から事情を聞こうとする治安当局などの電話が絶え間なくかかったが、この時点でさえ形になっていたものはなにひとつなかったのである。

すべてが決まった 2月24日

〝日本協会〟が狂ったように動きまわったのは2月24日である。

―イスラエル選手団―

・団長		モキシ・モルデシャイ			
・監督		アレキサンデル・ブロイエル			
・コーチ		イスラエル・ヴィダス			
・ドクター		シモン・リベルテ			
・GK	①	ロニット・スタイガー	(21)	174cm	主婦
	⑫	ハバ・コーン	(22)	173	事務員
・FP	②	ミチャル・ローゼンバウム	(20)	169	学生
	③	ミリン・グロス	(20)	173	秘書
	④	ショシャナ・イエルシャルミイ	(19)	161	体育学生
	⑤	エバ・ザカー・ブロイエル	(35)	170	主婦
	⑥	マーガリス・ファンガー	(22)	170	学生
	⑦	エスター・シクリー	(19)	167	学生
	⑧	イリス・コーン	(21)	184	秘書
	主⑨	ダリア・ケハ	(24)	164	学生
	⑩	シュロミット・シュロモヴィッツ	(18)	170	予備軍隊
	⑪	リョーラ・モスコビシ	(24)	168	体育学生
	⑰及⑯	モー・ハイラ	(22)	165	物理研究員
	⑭及⑦	サラ・アビラム	(18)	160	秘書

・( )内は年令。その右の数字は身長。○内数字は背番号。

治安当局—報道関係者—宿舎関係者をかけめぐり、どうにか受け入れのメドがついたのは夕刻だ。

荒川理事長は「この日を一生忘れないだろう」という。

あまりにもあわただしい事態の進展に、治安当局をはじめ、すべての関係者が"突貫作業"をしてくれたのだ。

夜になって、荒川理事長は新たに二人の常務理事に事態を知らせている。全日本女子もこの日から某地で練習を再開。

某日夜、イスラエル選手団は羽田着、都内某ホテルに入り、試合へ備えた。

緊急常務理事会が2月27日夜招集され、会場、日時が伝えられた。ちなみにこの時集った10名以外日本協会関係者で"総て"を知っている者は居ない。

「なんとか試合はできそうだ」—荒川理事長は久しぶりで自宅に戻った。

間組事件そして ゲリラ奇襲

第1戦が終って一息ついたところへ「間組爆破事件」のニュースがもたらされた。

神経質なばかりの警備に、いささか不満気だったイスラエル選手団もこの報せ以後は、改めて緊張しなおしたようだ。

第2戦で、日本は世界選手権行きを決めた。

嬉しそうな日本選手、その健斗を讃えるイスラエル選手の表情。

「多くの観衆の前で、この笑顔を見たかった」—荒川理事長はしばらくその場からはなれなかった。

某日朝、イスラエル選手団は、羽田をとび去っていた。

途中2都市に寄ってテルアビブに戻る。

「今日あたり彼女たちは着いたかな」——事務局に集った常務理事たちの話声をまるで引きさくように、そばのラジオが「アラブゲリラがテルアビブを奇襲」の速報を伝えた。

2月24日を起点として14日間。日本ハンドボール界にとって長く重く、疲れ切った日々であった。

3年前にも観客不在試合

本誌の調べによると、ハンドボール界における「観客不在試合」は、一九七二年（昭47）11月、ルクセンブルクで行われた第13回男子ヨーロッパカップ1回戦、ハポエルラマッガン（イスラエル）×デュデリンゲン（ルクセンブルク）戦がある。

この試合は、ルクセンブルク政府の判断によって未公開のうちに進められたと伝えられ、この時は報道関係にも、終了後、結果を報せただけというが、この点は詳らかにしない。

ダリア・ケハ主将訪問

イスラエルに関する資料はいっさいなし。来日後も練習は日本人を遠ざけ、利き腕はもちろん、身長も教えない徹底ぶり。

そんなムードの中で、ヴィダスマネジャーがそっと耳打ちしてくれたのは「ダリアの配球は抜群。彼女が攻防両面の柱だ」という"情報"。

なるほど、164㎝と小柄だがいかにも精かんな感じ。宿舎でもバスの中でも、みごとなリーダーシップをみせた。

——イスラエルナショナルは今回が初試合というが、あなた自身の球歴は？

「16才から始めましたから、もう9年になります。ハンドボールのもつ華麗なパスワークに魅せられたのが動機です。

ハンドボールは、ボールゲームのなかでもっともエレガンスなスポーツだと思いますわ」

——これまでどんな試合に？

「自分の所属するクラブから西ドイツとオランダへ遠征しましたしこのほか年間30試合程度のキャリアがあります。」

——練習は？

「1週に多くて3日間（通算6時間）ほどです。日本のトップチームは、1週6日の練習をしていると聞いて驚きました」

——今回のような状態をどう思う？

「ある程度予想してましたが、羽田での厳戒をみて、選手たちは、すっかり緊張してしまいましたとても試合できるコンディションではありません。我々の安全を案じて下さる日本協会に感謝はしますが、せっかくの友好の機会を失うのは残念です」

警備の囲いの中での箱根観光ショッピング……。「せめて、日本選手と一緒だったらよかったのに。」と残念がった。

彼女自身も、来日直前痛めた右ヒジが治り切らず、定評ほどの動きはなく、悔いの残る遠征だったようだ。

「いつまでもスポーツをつづけてます。日本女子がイスラエルへ来て下さるように伝えて下さい。待ってますわ」——別れ際羽田での言葉である。

疑問多い IHF の姿勢

このままではイスラエル問題は解決しない

杉　山　　茂

のみこめてない「アジアの事情」

今回のできごとをふりかえって最大の疑問点として残るのは、IHF（国際ハンドボール連盟）の態度である。

ヨーロッパ偏向の施策から、ようやく脱け出しつつある、というIHFだが、まだまだグローバルな目で〝国際問題〟を処理しようとする姿勢に乏しく、特に「アジアの事情」については、その場あたりで、なんら策をもたない感じさえうけた。このことは「中国問題」が未だに手をつけられていないことでも明きらかだ。

今回も、第1次段階で、いきなり、Bゾーン勝者のイスラエルをAゾーン（日、韓、台）に組み入れようと企って〝失敗〟している。

イスラエルがBでの既得権を主張せず承諾したのは、IHFの指示が正しいと思ったからではない

彼らはどんな条件であろうとも試合さえできればよかったのだ。

火の手は、韓国からあがり、結局、IHFはすごすごとこの新案をとりさげた。当り前の話である

イスラエルが正当なIHF加盟国である以上、彼らの権利を守らなければならないのは判るが、イスラエルとの対戦に、どれだけの難関があるのか、IHFは判ろうとしないし、解決しようとしていない。

日本が入国を許可したからといって、それだけで〝大会可能〟には結びつかないのだ。

日本は混乱防止役なのか

2月19日、大郎で、IHF・渡辺和美アジア選出理事は記者会見し「日本、イスラエル、アメリカあるいは西ヨーロッパのいずれかで、日本×イスラエル戦を行う」と明言しながら、なんとIHFは日本以外の各地に、打診すらもしていない。

「日本開催」のためのカモフラージュ発言だったのかも知れないが、IHFの安易さを示す一例である。

卒直に云って、IHFは、イスラエルをアジアといううより日本に押しつけている。

昨年春、第6回世界男子選手権アジア予選決勝で、日本が、第4次中東戦争の火がくすぶるイスラエル行きに難色を示し、「棄権」を考慮したことがあった（＝本誌116号参照）

この時のIHF並びに渡辺理事のろうばいぶりがそれをはっきりと示している。

IHFはなんと即日、日本協会に対し「高額な罰金と国際活動の休止」を噢したのである。

つまり、イスラエルが、アジア代表として、本大会へ進んだ時の〝混乱〟回避のため、日本の実力が必要だったのだ。

棄権や、対戦拒否はたしかにもってのほかだし、制裁も止むを得ないだろうが、その一方でIHFは一昨年の世界女子アジア予選の直前に棄権した韓国（＝本誌107号参照）や、今回のインドについては、まったくペナルティを課すそぶりさえ示さない。

この間の事情を渡辺理事に説明を求めても明確な返事は得られない。

イスラエルの 安全のために

イスラエルが各大会にエントリーする以上、日本がなめたような苦い経験は、つねにつきまとうだろう。しかもそれはイスラエルの安全のため苦心することに発しているのだ。

IHFとアジア選出理事はこの点を充分考えて欲しい。

その努力がない限り、国際ハンドボール界において「イスラエル問題」は永久に解決をみまい。

今回は、ともかくも、日本協会が、あらゆる手を使って、無事にイスラエルを迎え、送り出したが不眠不休でことを進めた日本協会・荒川清美理事長は、非公式の席ながら「今のままでIHFにイスラエル問題を認識させるためには日本が大会参加を見合せることも必要だ」とさえ云っている。

IHFの利己的な姿勢が崩れない限り、日本はつねに被害者だ。

例えば今回、日本協会が、治安当局との話し合いで、一定のスケジュール（来日期間）を設け、いっさいの準備（宿舎、交通、練習場の確保、それにともなう警備）をととのえたにもかかわらず、イスラエルは、一方的に、その期間からはみ出す訪日プランを発表した。

IHFと渡辺理事は、日本の立ち場を考え、日本協会の指定にしたがうようイスラエルに伝えた。

しかも、それを無視した場合は「イスラエルから試合権をとりあげ

る（日本の没収勝ち）」と日本協会を安心させながら結局は、イスラエルの〝強行上陸〟を認め、日本協会へ受け入れを頼んでいる。

イスラエルは、密室試合で行われることさえIHFから知らされていなかった（3月1日、モルデシャイ団長の話）し、ましてや、日本協会が綿密な受け入れスケジュールを渡辺理事に示し「それにしたがわせる」という同理事の確約をとりつけているなどとは思ってもみなかったようだ。

日本×イスラエル戦を東京で行わせるために、IHFと渡辺理事は日本協会へ空手形を示したのだろうか。

身勝手すぎる体質

IHFと渡辺理事の身勝手な話は小さなことになるといくらでもあるが、なかでも日本協会をあぜんとさせたのは、今回の第2戦の試合開始時間変更だろう。

渡辺理事によると、2国または3国での対抗戦の場合、第1戦と第2戦の間は、少くとも48時間空けなければいけないということであった。

日本協会は、イスラエルの安全のため、できるだけ滞日期間を短かくしようと2連戦(2日つづき)を計画したがはねられ、Aゾーンの場合も、各国が、4試合のため11日間もかける不経済を訴えたが、「48時間」は絶対のものとして連戦の提案は受けつけられていない

にもかかわらず、今回西ドイツから招いたレフェリーが、第2戦終了直後の航空券を手配していることが判ると、あっさり、2時間の繰りあげを行っているのだ。

このほか、使用球についても、日本協会へ会場設営についても、非常事態で試合を運行させようとしている現実を無視したような内容のものが多かった。

この体質、姿勢のままで、今後ほんとうにアジアハンドボール界の確立に手をつけるのであろうか人ごとながら心配になってくる。

それに、IHFのために日本協会も、そういつまでも人のよい顔ばかりしている必要はないだろう

ことわるまでもないことだが、今回、日本は、IHFのために試合を決行したのではないのである

とりあえず、4月12日西ドイツで行われるというモントリオールオリンピック予選(男子)の組み合せでIHFが「イスラエル問題」をどう処理するか見守っていたい

（筆者は前日本協会常務理事。イスラエル戦の渉外・運営担当者）

日本協会はなぜこのような措置をとったのか

□……日本協会が、今回の予選に際し、イスラエル遠征をあきらめ「日本開催」に踏み切ったのは、現在の中東政情では当然のことであった。

問題は「隠密試合」「覆面試合」「密室試合」と云われたその運営方法であろう。

□……日本協会が、未公開の線を打ち出した時、「そこまでしなくても」という声が予想外に多かったのも事実である。

治安当局の一部にも「日本ハンドボール協会は、やや神経質になりすぎた」（3月5日付・朝日）という意見があった。しかし、万が一の事態を日本協会は恐れた。

□……不隠な動きがあった場合、その迷惑はイスラエル選手に留らない。

観客にも、時には、その日まったくハンドボールに関係ない一般の人にも影響を及ぼす。

0.1％の不安。日本協会役員にとっては「無限大」にも等しい価だったのだ。治安当局も、結局は、この気持ちを〝支援〟してくれた。

イスラエルの人たちは商用などでかなり日本を訪れているというが、スポーツというのは、すべての行動が公けになり、一般人の社会活動と同じには考えられない。

□……警備の中でスポーツをすることの是非、「それほど世界選手権やオリンピック出場にこだわるのか」という意見。

だからといって「棄権」という手段を構じてもよかっただろうか

荒川理事長ははっきりこう云っている。

「義務づけられた試合は、万難を排して行おうと努力するのが我々の役目だ。それは、選手たちの精進にも報いることになる。

開催するための策もめぐらさず簡単に放棄してしまうことこそ〝悲劇〟ではないか」

□……日本選手たちは、初のナショナルマッチが、まるで練習試合のような雰囲気の中で進められたことを淋しがった。

イスラエル選手たちも同感だった。「無人ですって。なんということを——」と口々に訴えた。ただ、一人だけ違った選手がいた。彼女は兄をテロのため失くしている

彼女は日本に着くやすぐ手紙を書いた。「ママ、安心して下さい。日本協会は、私たちを実にていねいに守ってくれています。」

□……荒川理事長は復雑な心境をこうまとめている。

「自責の気持ちは、彼女らが滞日中に強かった。

すべてが終ってみると、これでよかったのだ、間違っていなかったと確信がもてるようになった。」

日本 一度もリード許さず

試合詳報

第6回世界女子選手権アジア予選決勝・日本×イスラエルの試合(2回戦制)は、2月28日、3月2日の両日、日本スポーツ史上初の「ドアー・クローズドゲーム」として東京で行われ、日本が圧倒的な強味を示して連勝、12月3日からキエフ市（ソビエト）で開かれる本大会へ駒を進めた日本の世界選手権出場は第2回以来連続の5度目。

第1戦は、国内における初めての女子公式国際試合として2月28日午後7時からイスラエルのスローオフで開始。審判＝E・レイチェル、H・ロスマニス(ともに西ドイツ)、公式計時員＝大塚文雄、公式記録員＝岡前義春

日本 19（9－1、10－3）4 イスラエル

得	【日本】		【イスラエル】	得
0	和田	GK	スタイガー	0
0	渡辺	GK	H・コーン	0
6	古佐原	FP	ローゼンバウム	0
2	島田	FP	グロス	0
4	蔵田	FP	イエルシャルミイ	0
1	山下	FP	ザカー	1
1	額賀	FP	ファンガー	0
4	菊地	FP	アビラム	0
0	加藤	FP	I・コーン	1
0	松下	FP	ケハ	0
1	河田	FP	ハイラ	1
0	紀野	FP	モスコビシ	1
19 (8)		7MT	(0)	4

○…緊迫した場内のムードに圧迫され冷静さを欠いたのはイスラエルよりもむしろ日本。攻防両面でまったく動きがまとまらず、しかも、イスラエルの長いリーチを頭にいれぬパスなどあって点がとれない。4分すぎ7MTで先制したが、そのあと再び凡攻、ほめた試合ぶりではなかった。

一方のイスラエルも、組織攻撃が型になっていず、日本のディフェンスに封じこまれた。

長身を利したコーンが時おりロングを放つがコースが甘く、10分を過ぎるころからは、落ちつきをとり戻した日本の一方的な展開となった。

日本は8本の7MTを得たものの、長身者の守備網をくずしてクリーンに得点する策をたてないと本大会で苦しむことになりそうである。（荒川清美）

第 1 戦
ランニングスコア

	〔日本〕	〔イスラエル〕
4分10秒	①額賀(7)	
7分	②古佐原	
8分	③島田	
10分20秒		①
11分	④菊地	
13分	⑤蔵田(7)	
13分20秒	⑥蔵田	
15分30秒	⑧菊地	
19分40秒	⑧山下	
21分		②
22分20秒	⑨古佐原(7)	
23分	⑩蔵田(7)	
23分15秒		③
40秒	⑪菊地	
1分		④
4分	⑫菊地	
6分30秒	⑬古佐原(7)	
9分50秒	⑭島田	
10分	⑮蔵田	
12分30秒	⑯古佐原(7)	
15分40秒	⑰蔵田(7)	
18分50秒	⑱河田(7)	
24分	⑲古佐原	

・(7)は7MTを示す

光ったファンガーのミドル

第2戦は3月2日午後5時からイスラエルのスローオフで開始。審判＝H・ロスマニス、E・レイチェル(ともに西ドイツ)、公式計時員＝大塚文雄、公式記録員＝岡前義春。

○…両国とも第2戦とは見違えるような動きを見せたため、テンポのある展開となった。

特に日本は、相手の攻撃を単調とみてとり、大たんなディフェンスから、得意の速攻へもちこもうと狙いこの積極策があたって、いきなり5－0とする好スタートをみせた。

イスラエルは、不調のダリアに代えて、監督夫人で35才のベテラン・ザカーをゲームメーカーに起用、日本守備陣の切り崩しをはかったが、パスがつながらず、わずかにファンガーが左右45度から走りこんで射つミドルが目についただけだった。

後半の日本は、若手を次々に繰り出したり、フォーメーションプレーをテストしたり余裕をのぞかせ、結局、1、2戦とも一度もリードを許さぬ完勝をとげた。

これで日本女子の公式国際試合は39試合となり通算成績は17勝1分21敗（勝率45％）。

なお、蔵田照美選手(立石電機)は48年11月デビュー以来、16試合連続得点をマークしている。（荒川）

日本 22（9－4、13－4）8 イスラエル

得	【日本】		【イスラエル】	得
0	渡辺	GK	スタイガー	0
0	和田	GK	H・コーン	0
5	古佐原	FP	I・コーン	1
4	蔵田	FP	ファンガー	4
2	山下	FP	グロス	1
3	額賀	FP	ザカー	1
0	菊地	FP	ローゼンバウム	0
4	島田	FP	ケハ	0
1	松下	FP	シュロモビッツ	0
0	河田	FP	モスコビシ	0
2	加藤	FP	イエルシャルシィ	1
1	穂積	FP	ハイラ	0
22 (4)		7MT	(1)	8

第 2 戦
ランニングスコア

	〔日本〕	〔イスラエル〕
1分40秒	①古佐原	
2分10秒	②島田	
3分10秒	③蔵田	
4分5秒	④島田	
6分	⑤古佐原(7)	
6分20秒		①
9分30秒	⑥古佐原	
10分30秒		②
11分10秒	⑦蔵田	
12分15秒		③
13分30秒	⑧蔵田	
14分10秒		④
16分30秒	⑨山下	
18分5秒	⑩蔵田	
19分	⑪額賀	
21分	⑫額賀	
22分15秒	⑬古佐原(7)	
1分10秒	⑭古佐原(7)	
3分40秒		⑤
5分	⑮山下	
13分	⑯加藤	
14分40秒	⑰島田	
15分20秒	⑱島田	
19分30秒	⑲額賀(7)	
20分30秒		⑥(7)
20分40秒	⑳松下	
21分50秒		⑦
22分15秒	㉑穂積	
23分15秒	㉒加藤	
24分10秒		⑧

日本、オリンピック予選出場権も手中に

IHF(国際ハンドボール連盟)は、モントリオール・オリンピック女子に参加する「3大陸（アジア、アフリカ、アメリカ）代表決定戦」に出場するアジア大陸代表を、今回終了した第6回世界女子選手権アジア代表とすることに正式決定、アジア予選決勝・日本対イスラエル2回戦終了後、渡辺和美IHF理事が日本チームにその旨を伝えた。

▽……全日本女子には気の毒なほど、緊張を強いられた予選であった。

Aゾーンに臨む時から、遠征しかも、実力が未知数の相手（韓国、台湾）とあって、少からずプレッシャーがあり、出発直前、井藁監督が急病で倒れるアクシデントも動揺を誘った。

▽……この遠征をなんとか切り抜けて戻ると、待ちうけていたのは〝密室試合〟だ。

ほとんどの選手は、帰郷する間もなく再招集され、コンディションをととのえるどころの騒ぎではなかった。

ただ、こうしたハンデキャップを割り引いても、今回の通算6試合は、歯切れのよい展開ではなく、モントリオールにつながる本大会（12月、キエフ市）までにアップできるか。関係者の気をもませているのは事実。

▽……いちばん目につくのは若さからくるもたつきである。

イスラエル戦を見ていてもディフェンスはともかく、オフェンスでは集散力に欠け、いたずらにリーチのある相手守備網へ突入、チャンスの芽をつぶしている。

また、独走に近い絶好機や、相手守備者を上廻る人数で攻めこみながら、凡失でゴールに結びつけられぬケースも目についた。

若さのぞかせた全日本

▽……キャリアのある選手が退陣したために、展開力が落ちこんでいるのは、ある程度予想された。しかし、本大会ともなれば、ミスの多少がそのままスコアに現われる、というほどだ。

相手のペースにあっさり乗せられてしまっては、とても勝機は訪れないだろう。

▽……井監督らコーチングスタッフは、クイックパスによるスピード攻撃をこのチームの主武器にしたい構想だが、そのためには、少々粗い守りを仕掛けられても、突き抜けるだけの力を養はなければなるまい。

また、ディフェンスも、必しも満点とはいえない。韓国戦の33失点（2試合合計）、イスラエル2回戦の8失点には、コーチングスタッフも渋い顔だ。

▽……渡辺慶寿技術部長は「たしかに今回の予選は、つまらぬミスが多かった。その反面、若さのもたらす吸収力の早さも相当なもの。残る8カ月で、上位入賞を狙う戦力を貯えることは充分可能だ」といっている。また荒川清美理事長も「今回はあまりにも精神的な条件が悪すぎた」とみており、チーム力は上向きと確信している。（Q）

ルーマニアら代表に決まる

第6回世界女子選手権の各大陸予選は、2月なかばに第1戦を終了、3日なかばに第2戦が行われヨーロッパ地域は、7代表が出揃った。

勝者はいずれも予想どおりの顔ぶれで、東欧5、北欧2カ国となり、第1戦の善戦（＝本誌前号既報）から注目された西ドイツは、ホームコートにルーマニアを迎え再び健斗したが勝利を奪うまでにはいかず、惜しくも本大会への道を閉ざされた。

なお、ヨーロッパ地域は、モントリオール・オリンピック（51年7月）には、特に出場枠がないため、今回の予選で敗れた国は、この時点で、オリンピック出場の夢をも絶たれたことになる。前回優勝のユーゴと開催国のソビエトは予選には出ていない。

第2戦の試合記録は次のとおり

▽ヨーロッパ地域

ルーマニア 15（4―6、11―9）15 西ドイツ

第1戦は16―11でルーマニア

東ドイツ 20（9―4、11―6）6 ブルガリア

第1戦は20―12で東ドイツ

ノルウェー 17（10―7、7―7）14 スペイン

第1戦は6―3でノルウェー

チェコ 38（18―2、20―1）3 イタリア

第1戦は22―8でチェコ

ポーランド 21（11―8、10―7）15 スウェーデン

第1戦は17―15でポーランド

ハンガリー 17（8―5、9―4）9 フランス

第1戦は16―6でハンガリー

デンマーク 11（5―6、6―5）11 オランダ
引き分け

第1戦は18―11でデンマーク

◇

アメリカ大陸予選・アメリカ×カナダは3月14日モントリオール16日ロックハーベン（アメリカペンシルバニア州）で行われているが、本誌〆切りまでに記録が入電していない。

◇

本大会の組み合せは、4月12日ドルトムント（西ドイツ）で、IHFにより行われる予定。

◇

【おことわり】世界女子のアフリカ大陸代表について、本誌は前号でアルジェリア（エントリーが一カ国のみのため認定）と報じましたが、チュニジアという報道もあり前号の記事全文を取り消します。

【訂正】本誌前号2頁・全日本女子韓国遠征メンバーのうち古佐原の得点34を35に、菊地の得点13を12に訂正。したがって、同4頁の個人得点7傑も訂正。

写真特集
日本対イスラエル戦

世界女子選手権アジア予選決勝
2月28日／3月2日・東京

↓日本は多彩な組織攻撃でポイントをあげイスラエルを圧倒した。シューターは額賀～第2戦～　（撮影　フォート・キシモト）



↓(右)古佐原の俊敏な攻撃はこのシリーズでも光った。（撮影・山田真市）
(円）島田・ケハ両主将によるペナント交換　（撮影・フォート・キシモト）













（上）コートを囲むのは報道関係者（２階）だけ，日本スポーツ史上初の「ドアークローズドゲーム」は異常な雰囲気のうちに進んだ　（撮影　山田真市）
（中左）応援にかけつけたシャウル・ラマチ駐日イスラエル大使夫妻に日本チームから記念品を贈る　（撮影　フォート・キシモト）
（中円）明るい話題をまいたのは日本の若手の活躍だ。シューター松下　（撮影　山田）
（下）詰めかけた記者団に次々と協会発表を伝える日本協会・荒川理事長（右端）　（撮影　山田）

（上）イスラエルの守りは荒く，日本は攻撃↘の芽をつまれた。④は蔵田，相手選手はグロス　　　　　　　　（撮影・山田真市）
（下）日本は2試合で14本の7MTを得た。シューター古佐原（撮影　フォート・キシモト）









↖（上）招かれた観客はイスラエル大使館関係者の10人だけ。日本側のための席は一つも設けられなかった。（撮影　山田）
（下）ブロイエル監督の注意を受けるイスラエル選手（撮影・山田）

イスラエルチーム

鎌倉・箱根に遊ぶ

（撮影・船津良夫）



↑鎌倉大仏前で記念撮影

イスラエルチームは第２戦終了後，鎌倉・箱根観光を地元警察の協力のなかで楽しんだ。
激戦と緊張の合い間にみせた彼女たちの笑顔である。





↑（上）箱根大涌谷の噴煙は彼女たちを驚ろかせた。

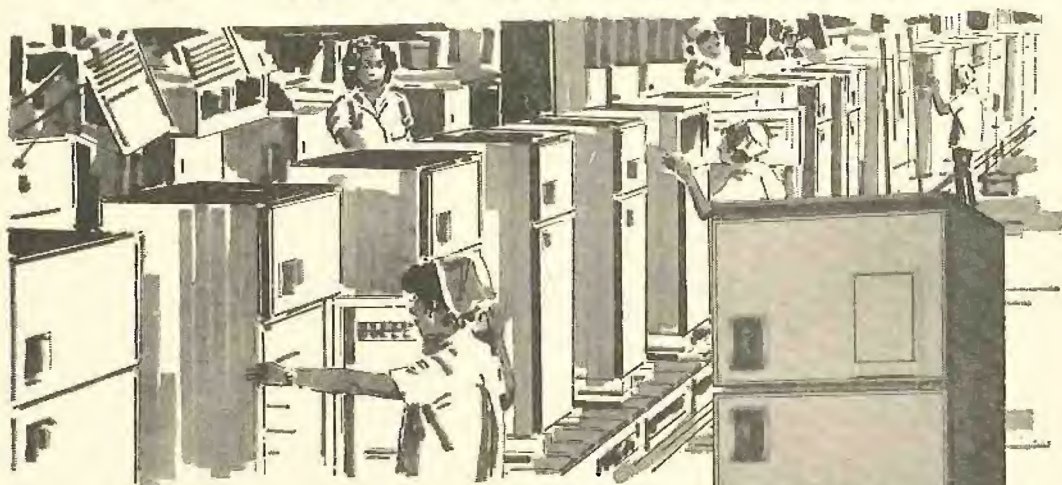
↑（下）残雪をみつけてはしゃぐグロス（右）とハイラ

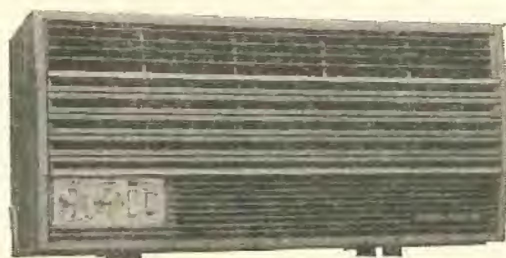


←おみやげをみつける役員・選手（鎌倉で）

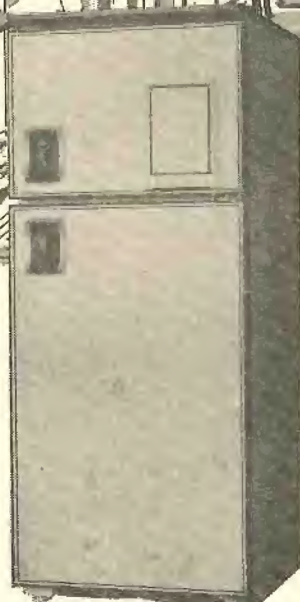
緑につつまれた近代的な工場で生まれる――

クールな世界の代表選手





日立ドライエアコン
RAS-229DY



日立冷凍冷蔵庫
R-204TP

ダイナミックな生産設備と徹底した品質管理のもとに、〈技術の日立〉にふさわしい製品を世に送りだすため、たゆみない努力を続けています。



株式會社 日立製作所 栃木工場

栃木県下都賀郡大平町富田800　〒329-44 TEL.02824－3111

アンケート

閉ざされた国際試合をこうみる

日本スポーツ史上はじめてのできごと、というより社会的な〝事件〟としてもとらえられた日本イスラエル戦。編集部では、4つの角度に意見を求め、今回のできごとを改めて考えなおすこととした。

ご多忙のなか、この企画のために原稿をお寄せ願った各位に対し誌上からお礼申しあげます。

記者の目

さまざまな論評が活字となり、電波となって流れた。

第一線で論陣をはねるスポーツジャーナリスト3氏に卒直な見解を求めた。

(順不同、敬称略)

大国　拓哉

(読売新聞運動部)

世界選手権大会出場権の獲得、おめでとう、といっても、日本スポーツ史上例のない隠密試合での栄冠で選手にとっても、ファンにとっても物足りない大会であったろう。

しかし、日本開催決定から大会日まで時間がなかったこと、しかも「過激派は世界のどこにでもいる」という、イスラエルのモルデシャイ団長のことばをかりるまでもなく、世界の過激派からねらわれているイスラエルを迎えてのことだけに、今回の協会のとった処置は仕方がなかったことだと思う。

だからといって、これでいいというわけではない。予選方式がきまったのは前年、それも早い時期であったはず。アジアの指導的立場にある日本、しかも世界選手権オリンピック出場という〝魅力〟に勝てない日本であれば、当然イスラエルとの対戦も含めて、早くから準備すべきであった。

それが一月中旬、Bゾーンでのインド棄権が決まってから、あわてて動き出したきらいがある。それも「火の粉をかぶりたくない」といった一時しのぎ的な考えが優先、第三国での開催に動き、無駄な時間を浪費したことはうなずけない。

万全の備えあれば、憂いなし。予選方式が決まったときから、イスラエル側とも連絡をとり、同国が出てくることも考慮して準備をしていれば、選手もファンも、そしてイスラエル側も、納得のいく大会ができたのではなかろうか。

福島　幸雄

(NHKニュースセンター9時スポーツキャスター)

何故あれ程までに神経過敏にならなければならなかったかやはり疑問が残ります。

第一に報道陣に公開、一般ファンに非公開というきびしい制限をしながら同じ会場で二試合を消化したのは意味がなかったと思います。一回戦制ならともかく、あの程度の報道管制では結局は頭かくしての例を出すまでもなく、一寸探ぐれば体育館の所在はわかる筈黙々とバスで運ばれたことが滑稽として残っただけです。

第二にある構内の体育館が使われたことは敷地内に入るのにチェックが行われるので事故を防ぐのに効果的と考えられたかも知れませんがむしろ危険を伴ったのではないかと思います。若し何かが起った場合、周囲の建物に囲れた「密室体育館」では逃げ場を失い被害は大きかったのではないでしょうか。むしろ駐車場などの空地にかこまれた体育館—東京体育館などの方が警備する方もしやすい利点があり、特に昼間の時間を選べば問題の起る可能性は殆んどなかったと考えます。

以上二点、結果からだけではなく安全だけを中心にした今度の試合の運営は、私達マスコミの良い材料ではあったんですがスポーツの持つ朗らかさを消し、国際競技にのぞむ選手達の意欲をそいだ点を惜しみます。

渡辺　邦雄

(朝日新聞運動部)

「なぜ隠密行動をとってまで試合を強行しなければならないのか」と、社内でも質問を受けた。私が、日本スポーツ界には五輪至上主義が、いかにはびこっているかを説明すると、大方の人はなんとなく分ったような顔をした。ハンドボールの最終目標も、やはり五輪出場であり、初めから棄権なぞまったく考えていなかったそうである。

多額の赤字を代償に実施した〝隠密試合〟だが、私には「五輪」を改めて考えてみるいい機会でもあった。しかし、ハンドボールの五輪出場がどれだけプラス作用するか、私はまだ十分に納得していない。

隠密試合の実施は、協会独自の判断によったという。日本開催までの時間的余裕がなかったことは同情できる。また、徹底した隠密ぶりは、見事というほかにない。だが、その方法においてマスコミを必要以上に刺戟し、予想以上の

センセーションを巻き起こしたときらいがある。報道機関にも反省すべき点はあるが、相互信頼の精神に立ってより柔軟で臨機応変の措置が、もう少しできなかったものか、と思う。

治安当局は、警備に大変な自信を持ち「たとえサッカーの公開試合でも大丈夫」とさえ、いっている。結果論かもしれぬが、私はいまだに「公開」で、むしろ堂々とコトを進めてもよかったのではないか、と思っている。治安当局に全幅の信頼を寄せることが前提だが……。

―競技団体のみかた―

〝体協〟という同じ建て物のなか。各競技団体のうけとりかたも復雑だったようだ。

特に、ハンドボール同ようアジア地域の中でイスラエルと顔合せする機会の多いチームゲーム（球技）関係の役員諸賢から寄稿願った。

（順不同、敬称略）

広　堅太郎

（日本ホッケー協会常任理事）

まず協会の皆さんに御苦労様、大変だったでしょうといいたい。

思い切った措置をテキパキと処理したのを間近かに見ていたのでその感が深い。

ミュンヘンオリンピック・テヘランのアジア競技大会を経験した私として、今回の協会の措置は適切であり、止むをえなかったものと思う。

おりしも間組事件があり、今回の措置に反対の意見が出そうな空気を一掃してしまったが、私としては当初から協会の措置を支持する気持ちをもっていた。

部外者の中には、こうまでしてスポーツをやる意味があるのかという意見があったのも事実だ。しかし私は最善の努力をして決行した事に拍手を送り、同時に大きな意義を感じる。

今日スポーツが多かれ少から政治の流れの中に組みこまれていることは否めない。

しかしこういう時代こそ、われわれは辛抱づよくスポーツを通して世界の平和、緊張の緩和に努力しなければいけないと思う。

ハンドボール界はその努力をしたのである。

富澤　貢一

（日本バスケットボール協会事務局長）

私はアマチュアスポーツを愛好するものである。スポーツはそれを楽しむ心、技術を追求する精神協力という人間関係、ルールや審判の存在などを成立の条件とするものと考えている。然るにスポーツに勝敗があり、名誉や伝統ファンや応援団といった第三者がうまれ、更らにはアマチュアリズムなどの問題から多くの弊害がうまれていることはなげかわしいことである。最近著ぢるしいスポーツの発展は単に純粋なスポーツ愛好家によるスポーツにとどまることが許されなくなり、政治や宗教などの問題が介入するにおよびスポーツ界にはアマチュアリズムの課題が大きくのしかかってきている。

ҹまたま世界選手権への出場権をめぐる日本対イスラエル戦がこの日本において密室試合という形でおこなわれたことは高度に発達したスポーツ界の現状から已むを得ぬこととはいえ悔に残念なことである。一方見方をトラブルの防止というか人命尊色の観点からすれば一つの方法であったと思考せざるを得ないであろう。

常識的には公認の記録は公認の競技場で公認の審判員によってうまれるものであろう。これらはすべて客観性が必要である故以であるとするならば第三者の存在を無視することは許されない筈であろう。われわれスポーツの愛好者はかかる事態が再び起らないようスポーツ界あげて努力しなければならない問題であるということで、このあとあじの悪い経験をいかしていただければ幸である。スポーツはわれわれのものでありすべての民族のものであることが実現されなければならないと確信しているからである。

―球界第三者の声―

日本ハンドボール界の内部から湧きでている意見も多様

そこで、第三者的立ち場にある〝関係者〟の声を集めてみた。

年代層によっても、みかたは異なっているようだ。

（順不同、敬称略）

伏見　和則

（全日本学連委員長・早大4年）

今回の女子アジア予選が、〝密室〟で行なわれたことは、スポーツのありかたとしては、問題があるでしょう。

しかし、現在の中東および国際情勢を考えれば、イスラエル選手団の身の安全を守る責任は日本協会にあったと思います。

考えれば考えるほどこの問題は難しく、「スポーツの本質」を選ぶべきか、「人命尊重」を選ぶべきかの二者択一に行きつくわけで結局は、日本協会の措置は「仕方がなかった」といういささか無責任な〝結論〟に落ちつきます。

オリンピック予選などでもイスラエルとの対戦は充分に予想されることであり、やはり、国際機関の課題として解決策を見出すことも必要で、努力を期待します。

アンケート・閉ざされた国際試合をこうみる

外山　准二
（元日本協会理事長・現参与）

現在のイスラエル、アラブの関係では、今回の処置は、仕方なかったと思うが、一部に批判があったように〝みっともなかった〟と思う。

いろいろ田村会長以下役員諸氏が審議をつくされた結果であり、とやかくの批判はさしひかえたい。しかし今後に男子ゲームもひかえているので、対イスラエル戦については、密室試合はやらないようお願いする。

一つの目標としてオリンピック参加を掲げて来た皆さんには酷だが、一回、二回、オリンピック参加を見送っても、将来他の国際試合のように明朗に試合できる日まで待つことが、私共アマチュアに課せられた運命でもあろう。

あえて申し上げれば、莫大な費用をかけ、オリンピック参加資格獲得のため、密室試合を行うことは避けたい。

井上　秀代
（前女子ナショナルチーム主将、旧姓・垂水＝大洋デパート）

第六回ハンドボール選手権のアジア予選が日本の某地で行われた事は知っていましたが世界の情勢その他、色々の動向から万が一に備えての密室試合になったと思いますがハンドボールファンにとっては国際試合に接するまたとない機会でありハンドボールをしている者にとっても同様の事が言え誠に残念に思います。

又協会の皆様には気苦労が多かった事と思います。選手の皆さんはよく実力を発揮されて予選を勝ぬかれて世界選手権出場を手にされた事は同じくハンドボールを志した者として嬉しく思います。

政治色がアマチュアスポーツ界の中に表われるのはスポーツを愛する者として耐えがたい事です。

しかし政治その他の世界の情勢から離れた真のスポーツを世界の各地で自由に友情と親睦の心で結ばれていると信じています。

今回は、やむを得なかった措置なのでしょうが、アマチュアスポーツは、コート上の選手とスタンドが一体になるところによさがあり、二度と見聞したくない試合でした。

最後に今冬の世界選手権で永年の念願だった上位入賞を祈ると共に今後のハンドボール界の発展に微力ながら協力したいと思います

読者の直言

多くの読者から、多彩な声が寄せられるであろう、という予想がはずれた。

投稿としては2通、ほかに「報道関係にも未公開とすべきだった」というはがきが1通。

読者の沈黙は、無言の肯定だったのだろうか、否定だったのだろうか。

宮崎　達夫
（東京・読者）

これを日本協会の勇断というべきなのか、某週刊誌のいうようにナンセンスというべきなのか。

しかし、一人のハンドボール愛好者としては、外部の動きに左右されることなく、「ともかくハンドボールをするのだ」と万全の備えを施した上で、大会を決行した姿勢に異論はない。

仮に、テロを恐れたり、政治を気にしたりして棄権という手段をとったとしたら、それこそ問題は尾を引いたのではなかろうか。

それにしても、スポーツはいまや、たいへんな立ち場に立たされることになってしまったものだ。

日本協会役員も、単に技術向上普及一途のエキスパートだけで構成されるのでなく、明確に社会情勢、国際勤向を判断できる人を主体として組み、今後の道を歩んで欲しい。

また、秋には当然、オリンピックの予選でイスラエルと対戦しなければならないのだろうが、今からその対策を建てるよう望んでおこう。

野村　誠司
（東京・読者）

苦慮したあげくの密室試合だったと思う。

しかし、密室であるが故に、騒ぎを大きくしてしまったとしたら皮肉である。

昨今のマスコミの動きをみていると、「秘密である」ということ自体をニュースとして扱う感じだ

今回の試合も、通常のまま、もし行っていたとしたら、案外、平凡に〝評価〟されて、すんだのではないか。

見えない影におびやかされながら、大会を開く日本協会の苦労は察してあまりがあり、さりとてイスラエル行も不安となれば、非公開も仕方がないが、問題をかかえている国の出場について、国際連盟が規制することを考えないのも不思議である。

スポーツファン以外の人ばかりでなく、一般の人にも興味(?)を抱かせた密室試合だったが、ある意味で、このような大そうなことができる現在の日本協会の組織力を見直したのも事実である。

（両氏とも原文を誌面の関係で短かくさせていただきました。）

井薫全日本女子監督の話

我々としては、試合ができたことで満足すべきなのかもしれないが、女子ナショナルチームにとって、国内では史上初めての公式国際試合だけに、多くのかたに、その試合ぶりを見ていただきたかった。残念だ。

イスラエルの選手たちも、せっかく遠征してきて、このような状態での試合は、さぞ淋しかったと思う。

このようなことをしなければ世界選手権や、オリンピックへ出場できないというのは、なにか割り切れず、IHFなどでなんとか対策をこうじて欲しい気がする。

難しい問題をのりこえて得た〝出場権〟だけに、12月の本大会までには、いっそうチーム力個人技を鍛えなおし、満足できる成績をあげたい。（この談話は第2戦終了後、記者団の質問に答えてのもの）

日本のハンドボールを世界の最高峰へ!

（協賛者御芳名・順不同）

日本ビクターが2連勝

第3回NBN（名古屋テレビ）杯全国選抜女子大会は、3月21、22の両日名古屋の愛知県体育館、23日岐阜の大垣市スポーツセンターで行われ日本ビクター（茨城）が昨年につづき優勝を飾った。

参加したのは女子実業団のトップクラス5チームで、各チームとも新戦力を加え、総当りでの優勝争いだった。

日立栃木（栃木） 5（2−4、3−0）4 ブラザー工業（愛知）
東京重機（東京） 18（11−2、7−5）7 田村紡（三重）
日本ビクター（茨城） 12（7−5、5−2）7 ブラザー工業
東京重機 18（10−2、8−3）5 日立栃木
日本ビクター 16（8−2、8−4）6 日立栃木
東京重機 17（9−7、8−7）14 ブラザー工業
日本ビクター 9（4−3、5−3）6 田村紡
田村紡 17（9−3、8−4）7 日立栃木
ブラザー工業 11（5−2、6−2）4 田村紡
日本ビクター 10（5−4、5−3）7 東京重機

【順位】①日本ビクター4戦全勝②東京重機3勝1敗③田村紡・ブラザー工業・日立栃木1勝3敗
▽最優秀選手　加藤（日本ビクター）▽最高得点選手折口（東京重機）16▽最優秀GK粂谷（日立）▽最優秀新人は該当者なし

得	【日ビ】			【重機】	得
0	渡辺	GK	GK	三紙	0
0	鈴木	GK	FP	古佐原	1
0	遠見	FP	FP	市川	0
0	池田	FP	FP	菊地	0
3	高野	FP	FP	折口	2
1	額賀	FP	FP	村上	3
4	加藤	FP	FP	町田	1
0	小島	FP	FP	田中	0
2	斉藤	FP			
0	穂積	FP			
0	染谷	FP			

（審・吉田、吉川）

10（0）7MT（1）7

○……予定されたデンマーク（クラブチーム）が不参加、顔ぶれは昨年と同じだったが、今年は2ケ月後に日本実業団リーグ（＝別掲）を控えているとあって、各チームとも、かなりこの大会を重視、シーズン初めながら好内容の試合を展開した。

チーム力で際立っていたのは、やはり日本ビクターと東京重機。

日本ビクターは、額賀、穂積（ともに全日本）が積極的になったので、加藤、高野（ともに全日本）の速射砲がいっそう活きてきた。

池田監督の用兵にもゆとりがのぞき、これで試合中にみられる〝波〟をできるだけ安定させれば、最上位の座を、各大会で確保できるだろう。ベテラン池田は「最優秀ディフェンスプレイヤー」として表彰をうけるなど相変らずの巧さ、元気さである。

東京重機は、攻防両面で古佐原（全日本）―折口のコンビが、骨身を惜しまず動きまわり、各チームは、この小柄な二人に振り廻されてしまっている。

しかも、菊地（全日本）、村上がかなり遠い所から射ってくるようになったので厚味ができた。

○……このほかの3チームは成績が示すとおり一長一短があり、同時にそれは、最上位を狙うための課題になっている。

田村紡は、昨シーズンとメンバーが不動なこともあって、まとまりはよいようだが、ディフェンスの粘りに欠ける。

このため、試合のヤマ場を持ちこたえることができず、相手にペースを与えてしまう。

日立栃木は、選手年令が若いにもかかわらず、ちょっと精気がない。

デビュー当時、走りまくった動きがかげをひそめているのは残念だ。

後半にチーム力を発揮するスロースタートもなんとかしなければいけないだろう。

ブラザーは相変らず、とらえどころのないチームである。

重機戦などをみていると、全員の動きもよく、これは、と思わせるのだが、その他の試合ぶりは展開力に欠けた低調なプレーを繰り返している。

「なにかキッカケをつかめば…」というのが、ブラザーへの定評（？）だが、そういつまでも、同じ言葉を繰しているわけにはいくまい。

個々の実力は、他チームに比べそん色はなく、今季はぜひ奮起して欲しい。

○……新戦力では、ブラザーが早くも楠石（粉河高）、山中（三本松）を起用しているのをはじめ、持ち駒不足に泣いた重機が横山、寺田（ともに秋田和洋女）、山口（大曲農）をベンチ入りさせている。

また、ビクターも染谷（昭和学院）、高橋（涌谷）と力のある二人を加え、特に、高橋は173cmと身体に恵れているだけに二〜三年後が楽しみ。

日立と田村には即戦力はいないが、バレーボール界から迎えた日立の吉田（古河二、164cm）は将来面白い存在。

昨年のインターハイ、国体高校で抜群の活躍を示した大谷（大阪）の池渕は立石電機（熊本）入りしている。

なお、この大会は、入場者からの投票をもとにした「ファン・アピール賞」の企画がたてられ、古佐原選手が最高得票、表彰をうけた。

（杉山）

4月11日から男子4強戦
東京・駒沢体育館で

全日本実連による第2回朝日招待全日本実業団男子選抜ビッグフォアリーグは、4月11、12の両日東京・駒沢体育館で開かれるが、このほど、当番チーム三景からその日程が次のように発表された。

▽第1日（12時30分）大崎電気×三景、大同製鋼×湧永薬品
▽第2日（10時30分）湧永薬品×大崎電気、三景×大同製鋼、湧永薬品×三景、大崎電気×大同製鋼

入場券は三景ハンドボール部（電03―861―七一六一）で取り扱っている。

関東学連 27日開幕　関東学連は、春季リーグ（男子1、2部及び女子）の日程を次のように内定した。会場は駒沢屋内球技場と駒沢体育館、

▽日程　4月27、29日、5月1、4、5、9、11日（7日間）

NHK杯 決まらず　日本協会は、今秋9月、東京で有力外国チームを迎え開催を予定している「第22回NHK杯大会」についてプレオリンピックなどの関係で具体的な内容がまとまらず、場合によっては、NHK側の了承を求め今年度は休会とする。

日韓高校 ソウルで　日本体協は、今夏復活する日韓高校交歓競技会の会場がソウル市に決定したと発表した。同競技会は8月22、24日の両日、ハンドボール男女など9競技が行われる。

☆★☆★☆★☆ 海外トピックス

杉山茂
（NHK運動部）

ユーゴが首位 デンマーク国際

2月から3月なかばにかけてさまざまな国際トーナメントが各地で行われている。

王者・ルーマニアの動きがあまり伝わってこないが、この沈黙の背景がどのようなものか。無気味である。

オリンピック2連勝を狙うユーゴは、デンマーク国際で久々に首位となったが、GKアルスラナジッチが姿を消したほかメンバーをかなり入れ替えており、デンマーク戦を落としている。

この大会は2月28日から3月2日までオデッサを中心に4ケ国が集って開かれたもので、激戦つづきだった。

特に、ステンツェル新監督に率いられた若い西ドイツが、復調の兆をのぞかせはじめたことや、デンマークも地元の利があったとは云え健斗している。

チェコもクレピンダル、ヤリ、カバンらのベテランが健在で安定したチーム力を見せた。

この層の充実は、モントリオールでの白熱を今から予想されるもので、日本の宿願、ベストエイト進出はいっそうけわしくなりそうだ。

ユーゴ　20（9－7、11－10）17　西ドイツ
チェコ　15（9－3、6－10）13　デンマーク
西ドイツ　20（7－6、13－8）14　デンマーク
ユーゴ　19（7－2、12－12）14　チェコ
チェコ　17（7－8、10－4）12　西ドイツ
デンマーク　17（10－6、7－10）16　ユーゴ

【順位】①ユーゴ（得失点差7）②チェコ（2）③西ドイツ（マイナス2）④デンマーク（マイナス6）

▽個人得点①クリボカピッチ（ユーゴ）19②B・ラルセン（デンマーク）16③ハベル（チェコ）12

スウェーデン順当勝ち 北欧6ケ国選手権

恒例の北欧選手権（男子）が2月10日からコペンハーゲンを中心にして行われ、初めてファロー諸島も参加、6ケ国が争った。

3ケ国づつの予選リーグではB組でスウェーデンが予想どおり勝ちあがったのに対し、A組はノルウェー×デンマークが接戦を演じノルウェーが逆転勝ちした。

スウェーデン×ノルウェーの決勝は活溌な得点の入れあいとなったが、スウェーデンが前半の劣勢を一気にくつがえす反撃に成功、優勝を飾った。

▽予選リーグA組
スウェーデン　18－16　アイスランド
スウェーデン　26－15　ファロー諸島
アイスランド　27－17　ファロー諸島
▽同B組
デンマーク　24－12　フィンランド
ノルウェー　20－16　デンマーク
ノルウェー　16－12　フィンランド
▽5位決定戦
フィンランド　28－16　ファロー諸島
▽3位決定戦
デンマーク　17（6－3、11－12）15　アイスランド
▽決勝
スウェーデン　17（10－5、7－10）15　ノルウェー

流行する"ショートニング"

当欄でも前にいちど紹介したショートニングマッチつまりハーフ30分を短かくして行う試合が相変らずヨーロッパ各地で盛んだが、2月19日パリで開かれトーナメントは、20分ハーフの国際試合だった。

参加したのはチェコ、フランス、アルジェリアの3ケ国。

午後8時の試合開始で3試合を消化するわけだが、会場のクーベルタン体育館には三千のファンがつめかけ、スピーディな試合を楽しんだ。

結果は予想どおりチェコが地力を示して快勝した。

フランス　11－10　アルジェリア
チェコ　21－8　アルジェリア
チェコ　17－12　フランス

ハンガリーが優勝飾る 強豪激突の女子国際

一方、女子は、14ケ国が世界選手権予選に出場中（＝本誌13頁参照）とあって、あまり、大会のニュースは伝わって来ないが、2月はじめにチェコで、世界の上位国を揃えたビッグ・トーナメントが開かれ注目を集めた。

参加したのは2年前の世界選手権上位6ケ国のうち4位のソビエトを除く5ケ国と感星視されているブルガリアという豪華なもの。

予想どおりすさまじいばかりの試合がつづき、ファンを沸かせたが、結局、ハンガリー（世界3位）が、29才のエースアタッカー、トース・ハルサニイ（1m86）の活躍を中心にチェコ（6位）に敗れた以外は、ユーゴ（1位）らをおさえて優勝を飾った。

女王ユーゴは、緒戦でポーランド（5位）に14－18で敗れて調子

を崩した。

ルーマニア（2位）も、攻守のリズムを狂はせブルガリアに15―11で勝っただけ。

地元チェコはハンガリーを16―14で降し、地元の声援に応えるかとみえたが、ポーランド（5位）と引き分け、ユーゴに敗れて2位にとどまった。

【順位】①ハンガリー4勝1敗（得70、失50）②チェコ3勝1分1敗（72、60）③ユーゴ3勝2敗（75 64）④ポーランド2勝1分2敗（69、62）⑤ルーマニア1勝4敗（50、73）⑥ブルガリア1勝4敗（58、63）

来日チーム その後　各国の選手権リーグは、終盤を迎えているが、日本に来たおなじみのクラブの戦況をのぞいてみると、グンメルスバッハ（西ドイツ、昭46来日）が相変らず抜群、西ドイツ全国リーグ北地区で14勝3分と土つかず。このほか同地区に所属するGW・ダンケルセン（昭47来日）は3位、THW・キール（同）は8位。南地区のEA・ギョッピンゲン（昭48来日）は6位と元気がない。

昨春来日のスタジオン・IF（デンマーク）は、新旧交替の機をやはり誤ったようで5勝3分8敗の7位。ステラ・サンモール（フランス、昭39来日）はフランスリーグBゾーン1位で全国優勝を狙っている。

女子のOSC・ラインハウゼン（西ドイツ、昭48来日）は、来年から全国リーグが発足するとあって1部リーグ西地区で張り切った試合ぶりをつづけていたが2勝6分10敗で全日程を終了、全国リーグ加盟は難しそうだ。

ヨーロッパカップ

グンメルスバッハ敗れる　ブカレストも決勝に進めず

男子第15回、女子第14回ヨーロッパカップトーナメントは終盤を迎え、それぞれ準決勝が終了、男子で強豪グンメルスバッハ（西ドイツ）が敗れる大波乱がおきた。

グンメルスバッハは、ASK。V・フランクフルト(東ドイツ)と対戦。フランクフルトは第1戦、遠征の不利をおいながらピーチェエンゲル、ローズらがすばらしい斗志をみせ、後半なかばからの反撃に成功、22―18で勝利を握った。

4点のハンデ、しかも乗りこみの第2戦とあって、さしものグンメルスバッハも苦しいのではとみられたが、第1戦をしのぐ激戦となり、残り7分、グンメルスバッハは18―15とリード、奇跡的な逆転を期待させた。

しかし、フランクフルトはその直後1点を返し、残り4分間を必死に防戦、試合には敗れたものの合計得点38―36で決勝進出を決めた。

第1戦は、西ドイツ・ドルトムントのウェストハーレンホールに約一万二千の大観衆が詰めかけ、その売りあげは十六万五千マルク（邦貨約千六百五十万円）という驚異的なものとなった。

もう一方のカード、ステアウア・ブカレスト（ルーマニア）×ボラクバンヤ・ルカ（ユーゴ）も、大熱戦となり1勝1敗、得点合計も30―30と互角、規程により第1戦の勝者、ルカの勝ちあがりと決まった。

女子は、優勝候補の筆頭、スパルタク・キエフ（ソ連）がIHFS・ブカレスト（ルーマニア）の健斗にあったが、第2戦に大勝。SC・ブダペスト（ハンガリー）を降したロコモティブ・ザグレブ（ユーゴ）と優勝をかけて対戦することになった。

▽男子準決勝第1戦

ASK・フランクフルト（東ドイツ）　22（12―8、10―10）18　VfL・グンメルスバッハ（西ドイツ）

▽同第2戦

ボラク・バンヤ・ルカ（ユーゴ）　19（9―11、10―6）17　ステアウア・ブカレスト（ルーマニア）

VfL・グンメルスバッハ　18（9―7、9―9）16　ASK・フランクフルト

ステアウア・ブカレスト　13（8―7、5―4）11　ボラク・バンヤ・ルカ

▽女子準決勝第1戦

スパルタク・キエフ（ソ連）　11（5―6、6―5）11　IEFS・ブカレスト（ルーマニア）

ロコモティブ・ザグレブ（ユーゴ）　16（9―6、7―5）11　SC・ブダペスト（ハンガリー）

▽同第2戦

スパルタク・キエフ　16（8―4、8―4）8　IEFS・ブカレスト

SC・ブダペスト　14（10―5、4―6）11　ロコモティブ・ザグレブ

読者の海外球信　欧州旅行中の読者滝野忠氏（東京）から次のような便りが編集部へ届いた。

『3月8日夜、待望の西ドイツ全国リーグ（ブンデス・リガ）北地区のグンメルスバッハ×ヴェリングホーヘン戦を見物。千人収容のウェストファーレン第4ホールに千三百の観衆が詰めかけ興奮度は最高。日本では考えられぬ騒然さだ。試合も二転三転、結局15―15の引き分けに終ったが、文字どおり総てに「本場」を感じさせた』

ユーゴ、中国で完勝（4試合）

本誌編集部が各筋からの情報をまとめたところによると、前号所報の、中国を訪れたユーゴナショナルチームは、北京などで4試合を行ったようで、いづれも完勝した。

ユーゴの陣容は詳らかにしないが、ホルバト、ミルヤク、新鋭クリボカピッチらベストメンバーを送りこんだものとみられる。

中国の活動が、最近伝えられたのは、昨夏のルーマニア・チミソアラ工業学院遠征（＝本誌123号参照）についで2度目。

ユーゴの遠征記録次の通り。

ユーゴ　35（19―8、16―4）12　中国陸軍選抜

ユーゴ　39（15―8、24―8）16　北京選抜

ユーゴ　44（26―8、18―5）13　天津選抜

ユーゴ　32（16―8、16―7）15　安徽選抜

全国スポーツ大会でも実施

2月16日各報道機関が伝えるところによると中国の第3回全国スポーツ大会が、今秋9月7日から27日までの3週間、成人28競技、ジュニア8競技にわたって開かれ16年前の第1回、10年前の第2回大会では実施されていなかったハンドボールが成人種目に加えられていることが明らかとなった。

中国におけるハンドボールは急上昇している感じだ。

本誌恒例

49年度の重大ニュース〈選・編集部〉

①世界女子アジア予選決勝・日本対イスラエル戦「密室試合」で決行（50年2月）

オリンピックの中間年、平穏に終るかとみえた今シーズン、年度末に巻きおこった一大旋風といえた。

イスラエルへの不穏な動きに備えた日本協会は、治安当局、報道関係者の理解を得ながら、2月28日、3月2日の両日、東京で日本スポーツ史上初の一般未公開試合開催に踏み切った。

棄権か、強行か——苦悩の末の〝結論〟は、内外に大きなショックを与えたが、ともかくもイスラエルチームを無事に迎え、送り出せた。

拍手も歓声もない会場で、全日本女子は世界選手権（50年12月、キエフ市）への出場権を手にしたが、国際情勢の複雑な波をまともにうけた日本協会関係者の苦しげな表情は、ゆがんだままであった。

なお、この対戦の前に、日本は韓国で韓国、台湾と第一次予選を戦い快勝した。

②評議員制に代り代議員制施行へ（50年1月）

積みあげられた委任状によって重要案件を次々と可決してきた評議員会に、健全な日本協会運営はもはや期待できないとした田村—荒川体制は、約1年の検討期間を経て、代議員制度の採用に踏み切り、50年1月1日規約改正、施行した。

2月23日の初会議は、はたして活潑な論戦が展開され、中央—地方の両輪が相まって日本協会前進をはかる期待を強めさせた。

③初の教員養成大学研修会開く（8月）

将来の体育指導者を目指す若者たちに正しい知識と、秀れた指導力を習得してもらおうと、かねてからその実現が待望されていた事業が文部省のバックアップを得て成った。

東京・青少年総合センターに全国19大学から144名を集めた研修会は4日間にわたって、多彩なプログラムを消化、成果をおさめた。

④東ドイツとの交流なり、男子ナショナル来日（9月）

日本体協事業に組み入れられ、ガンショウ、ラケンマハー、J・ロスト、ケーラートら世界一流の巧者、強者18人が来日、全日本などと6戦、世界2位のたくましさを見せつけ全勝した。

日本側も、大同製鋼(愛知)があわや勝利をと思わせる善戦をみせ全日本も第4戦で残り5分までリードを奪うなど健斗した。

また、全日本が対戦した4試合すべてがテレビ中継（NHK1、民放3）されたのも特筆される。

⑤アジアハンドボール界の拡充とアジア競技大会種目への加入（9月）

グローバルなスポーツへ着実な歩みをとげる国際ハンドボール界のなかで、アジア地域の拡充も目ざましいものがあり、今年度は新たに朝鮮民主主義人民共和国、ホンコン、インドなどがIHFへ加盟、その数は日本を含め12ケ国に急成長した。

また、9月テヘランで開かれたアジア競技大会の際、クウェート、中国、パキスタンなどの積極的な働きかけで、同大会の実施種目に加る朗報ももたらされた。

その一方、各国間のもつれた糸にアジアハンドボール界もからまれ、中国などによるアジアハンドボール連盟をIHFが黙殺するなどの事態がつづいている。

⑥全国高体連ハンドボール部創立25周年を祝う（8月）

日本ハンドボール界に大きな位置を占める高校界——全国高体連ハンドボール部が昭和25年に発足してから25年の歳月が経った。

高校界の歩みがそのまま球界の成長といってもよいほど、大きな足跡である。

8月1日から北九州市で開かれた記念大会（第25回全日本高校選手権）は、新しい門出にふさわしく男子・久留米工(福岡)、女子・大谷(大阪)に初優勝が輝やいた。

⑦大同製鋼(愛知)、2年連続のビッグタイトル独占

昨年度破竹の進撃で全国4大タイトルを手中にした大同製鋼の好調は、今シーズンもつづき、6月の第15回全日本実業団、10月の茨城国体、12月の全日本総合と三大々会に優勝、2年連続国内ビッグタイトル独占という偉業を遂げた。

全日本選手5名を主軸とした攻守は、史上最強チームへ着実な成長を示しており、特に9月の東ドイツ戦(前掲)で18—19の善戦を演じたことは、ヨーロッパでも大きな話題となった。（注・今年度からNHK杯が国際試合に変更され

たため、大同の手にできるビッグタイトルは三つに減った。）

⑧世界学生選手権（男）へ全日本学生12年ぶりに出場、10位。（50年1月）

FISU（国際学生スポーツ連合）の主催する世界学生選手権は各国の新しい戦力、若い戦力を探る意味で注目の存在となっているが、全日本学連はさまざまな条件を克服して、第1回（昭38）以来、12年ぶり2度目の出場を決め、藤松博団長ら20名がルーマニアでの第6回大会へ参加した。

海外遠征初経験者が多く、欧洲特有の体力を利した押しこみにとまどいながらも、スピーディな技術を駆使して健斗、10位（参加12ケ国）となった。

⑨早大、全日本学生に優勝。部創立37年目の全国タイトル獲得。（11月）

昭和12年部創立という日本球界きっての名門・早大が、仙台市における第17回全日本学生選手権で宿願の優勝を飾り、37年目で全国タイトルを飾るという感激となった。

過去においても、いくどか頂上一歩手前まで駒を進めながら勝運に恵れなかったものだが今シーズンの早大は、学生界にあっては心技体がとびぬけて充実、王者にふさわしい試合ぶりであった。

⑩荒川清美理事長、日本体協訪独スポーツ少年団々長として遠征。（7月）

日本協会のけん引車として活躍するかたわら、日本体協理事の要職につく荒川理事長は、今年度から交流が本決りとなった日本—西ドイツスポーツ少年団交流の日本代表団々長に推され、7月14日から約1ケ月、西ドイツ各地に親善の旅をつづけた。

ハンドボール人が、日本体協国際事業の団長をつとめるのは初めてのことで、荒川氏の情熱もさることながら、日本ハンドボール界そのものの力が外部に評価されたものとして関係者を喜ばせた。

そのほか

▽デンマークの名門「スタジオン・IF」（男）来日（4月）▽テクニカルコミティ構想の第1弾として「3部（技術・普及指導・審判）合同会議」が発足、初代議長に安藤純光氏選任（5月）▽全日本実業団男子、初のサーキット化（6月）▽日韓高校スポーツ交歓競技会〜ハンドボールなど9競技〜中止（8月）▽初の全国高専選手権大会開く（8月）▽国体、現行制度に終止符、高校の部解消へ（10月）▽東京重機（東京）、全日本総合選手権に総勢8人で優勝（12月）

東海高校室内

名南工と岐阜南が初優勝

第3回東海高校室内選手権は2月23日、静岡市民体育館に東海4県の予選勝者、男女あわせて8チームが集まり行われた。

各校とも新メンバーで安定した力に欠けたが、それなりに試合内容はもつれ、女子の岐阜南×四日市（三重）が抽せん勝負になるなど接戦がつづいた。

男子は、攻撃力に優る名南工（愛知）が、清水商（静岡）を振り切り初優勝、昨年6月の東海高校につづき、今年度〝東海2冠〟を飾った。

女子は、岐阜南が、有力とみられた市郡学園（愛知、前年優勝）を制し初優勝。

▽男子準決勝（＝1回戦）

名南工（愛知） 14（8―6, 6―4）10 四日市工（三重）

清水商（静岡） 14（8―7, 6―5）12 県岐阜商（岐阜）

▽同決勝

名南工 15（7―5, 8―7）12 清水商

▽女子準決勝（＝1回戦）

岐阜南（岐阜） 7（3―2, 4―5）7 四日市（三重）

引き分け

抽せんで岐阜南高の勝ち

市郡学園（愛知） 11（7―3, 4―7）10 清水商（静岡）

▽同決勝

岐阜南 15（6―4, 9―6）10 市郡学園

各地の記録

大同、辛くも本田を破る

NHK（名古屋）杯をかけた第14回東海室内選手権は2月23日、静岡市民体育館に各県の代表男女4チームを集めて行われた。

男子1回戦は、実業団×教員の顔合せとなったが、国内最上位にある大同製鋼（愛知）、本田技研鈴鹿（三重）が静岡、岐阜両教員の健斗を退けて快勝した。

大同×本田の決勝は、本田ディフェンスが粘りをみせたため激戦となり延長へもつれこみ、その後も互角に進んだが、後半大同は松原が貴重な勝ちこし点を決め、辛くも全日本チャンピオンの面目を保った。大同の優勝は2年ぶり4度目。

女子は予想どおり田村紡（三重）とブラザー工業（愛知）の決勝となり2日前に韓国遠征（世界選手権予選）から帰国した全日本3選手を加えた田村紡が、前半の優位を保ち、11連勝の偉業をとげた。

▽男子準決勝（＝1回戦）

大同製鋼（愛知） 30（13―4, 17―7）11 静岡教員（静岡）

本田技研鈴鹿（三重） 33（18―3, 15―2）5 岐阜教員（岐阜）

▽同決勝

大同製鋼 14（6―5, 5―6 … 2―2, 1―0）13 本田技研鈴鹿

▽女子準決勝（＝1回戦）

田村紡（三重） 18（10―2, 8―4）6 紅葉会（岐阜）

ブラザー工業（愛知） 16（8―2, 8―1）3 浜南ク（静岡）

▽同決勝

田村紡 12（8―4, 4―4）8 ブラザー工業

○……この大会は毎回、NHK（中部本部）が東海地域にテレビ中継するのを慣例としており、参加チームもそれを意識、全国大会につながらぬローカル大会としては盛りあがりのある内容をみせる。

こうした地元マスコミとの密着は、愛知協会を中心に東海協会の活動が際立っている。

○……マスコミ対策は、日本協会にとっても重大な課題の一つだが、ニュートスバリューのバロメーターとしては、中央だけではなく地方における動きも多大な影響がある。

地方協会役員が試合（大会）があるたびに、マメに報道関係へ、ニュース提供のサービスをつづけていなければならぬ。

どのような事業も、中央・地方の関連は欠かせぬが、PR面はともすれば、中央だけのものと考え勝ち。その点、東海協会が時には日本協会を上廻る動きを示すのはみごとだ。

投書欄・明日への提言

学生界全般の向上企れ

機関誌2月号でも報じられたが全日本総合選手権における学生勢の低調は、40代前後の愛好者にとっては、かなりショックなできごとであった。

なるほど、4年間という〝制限〟のある学生チームよりも、精選した選手を集め、円熟一方の企業チームの方が競技力を増強できる好条件下にあるが、だからといって学生界不振の弁解にはならないであろう。

学生界そのものが、学生チームの消長を、もう少し組織として考えることも必要だし、往時の勢いをとりもどすための努力をしなければいけない。

最近の学生チームは、どうも仲間うちだけの勝負にこだわりすぎて、進取の精神に欠けているように思う。

企業チームが、実連の傘下の中で、次々と新企画とも思える大会を開き、レベルアップしているのに比べ、学生界の競技会は十年一日だ。

思い切って春のリーグは1部だ2部だなどという壁をとりはずして全加盟校のトーナメントでもいいだろうし企業チームとの対抗戦（大会）を催すのも一策だろう。

各大学の部員数は、極めて少ないようだし、試合（実戦）即練習が特効薬だ。

OBなり、監督なり、学連役員なりが、学生界全般のレベルアップに目をもう少し向けないと、やがては全日本のベストエイトさえ社会人によって塗りつぶされることになりかねない。

【東京・寺内一雄・OB】

★……投稿歓迎・用紙自由。600字以内。

本誌51～100号を頒売

日本協会では、保存資料の整理のため、昨年10月についで本誌バックナンバーを頒売いたします。

今回、おわけするのは51号（42年3月）から100号（47年8月）までです。

ご希望のかたは、5月10日までに、往復はがきに希望号数、部数、送付先を書き日本ハンドボール協会（東京都渋谷区神南1の1）あてお申しこみ下さい。

在庫があります場合は、折り返し、料金（含送料）をご通知いたします。

川口工、深谷女盛り返す

▼埼玉県高校新人戦（2月・菖蒲高校体育館）

▽男子準々決勝
菖蒲 21—8 聖望
浦和西 22—6 秩父
川口工 20—6 八潮
浦和市立 12—6 教大付坂戸

▽同準決勝
菖蒲 10—9 浦和西
川口工 5（分）5 浦和市立
7MTコンテストで川口工の勝

▽同3位決定戦
浦和西 16—9 浦和市立

▽同決勝
川口工 9（4—3 5—5）8 菖蒲

▽女子準々決勝
深谷女 26—1 聖望
川口北 8—3 尚山女
浦和西 15—9 朝霞
浦和市 13—0 浦和南

▽同準決勝
深谷女 9—1 川口北
浦和市立 10—2 浦和西

▽同3位決定戦
浦和西 11—9 川口北

▽同決勝
深谷女 6（4—4 2—0）4 浦和市立

都城西、5年ぶり王座に

▼第10回宮崎県高校新人大会（2月・宮崎県体育館）

▽男子決勝リーグ
宮崎工 8（分）8 西都商
泉ケ丘 8—5 宮崎工
泉ケ丘 8—4 都城工
宮崎工 16—4 都城工
泉ケ丘 6（分）6 西都商
西都商 10—7 都城工
【順位】①泉ケ丘②西都商③宮崎工④都城工

▽女子決勝リーグ
都城西 11—8 小林商
都城西 9—6 泉ケ丘
小林商 14—4 泉ケ丘
【順位】①都城西②小林商③泉ケ丘

上田ク、順当の優勝

▼第14回長野県総合選手権（2月佐久高体育館）

▽男子準々決勝
上田ク 19—12 長野教員
北農高 36—18 美須々ケ丘高
屋代高 21—12 臼田高ク
坂城高 32—10 北農クC

▽同準決勝
上田ク 19—11 北農高
坂城高 8—6 屋代高

▽同決勝
上田ク 28（13—7 15—8）15 坂城高

▽女子準々決勝
小商ク 14—7 小諸商高
美須々ケ丘高 14—4 城南高
佐久高 12—11 仙禄ク
小諸商高B 14—10 美須々丘OG

▽同準決勝
小商ク 16—5 美須々ケ丘高
小諸商高B 21—6 佐久高

▽同決勝
小諸商高B 21（11—7 10—11）18 小商ク

女子は佐世保商勝つ

▼長崎県高校新人選手権大会（2月・長崎工）

▽男子決勝リーグ
佐世保北 13—8 口加
長崎工 22—7 長崎日大
佐世保北 19—8 長崎日大
長崎工 22—7 口加
長崎工 12—5 佐世保北
口加 14—8 長崎日大
【順位】①長崎工②佐世保北③口加④長崎日大

▽女子決勝リーグ
佐世保商 14—9 長崎北
佐世保北 4（分）4 島原農
佐世保商 13—9 島原農
佐世保北 5—3 長崎北
佐世保商 7—6 佐世保北
長崎北 9—3 島原農
【順位】①佐世保商②佐世保北③長崎北④島原農

三春台ク、日本発条制す

▼神奈川県室内選手権（2月・平沼記念会体育館ほか）

▽一般男子準々決勝
三春台ク 30—7 関東学院大
神奈川教員 20—12 法政二ク
セントラル自動車 19—13 一商ク
日本発条 不戦勝 東海大

▽同準決勝
三春台ク 24—8 神奈川教員
日本発条 9—8 セントラル自動車

▽同決勝
三春台ク 17（11—3 6—3）6 日本発条

▽同女子決勝リーグ（地域選抜対抗）
神奈川中ク 13—5 神奈川北ク
神奈川南ク 6—5 神奈川北ク
神奈川中ク 9（分）9 神奈川南ク
【順位】①全神奈川中ク②同南ク③同北ク

▽高校男子準々決勝
一商 10—2 桐蔭
高津 21—14 平沼
県商工 7（分）7 横浜商工
7MTコンテストで県商工の勝ち
立野 没収試合 希望ケ丘

▽同準決勝
一商 14—11 高津
県商工 18—10 立野

▽同決勝
県商工 10（3—4 7—4）8 一商

▽同女子準々決勝
高津 4—3 東
京浜 8—3 桜ケ丘
明倫 不戦勝 厚木商
大津 13—8 川和

▽同準決勝
京浜 2（分）2 高津
7MTコンテストで京浜の勝ち
明倫 13—4 大津

▽同決勝
明倫 13（6—1 7—2）3 京浜

県岐阜商、男女制覇成らず

▼岐阜県高校新人大会（2月・岐阜県民体育館）

▽男子準々決勝
大垣農 15（延）14 岐山
岐阜北 16—13 益田
市岐阜商 13—12 多治見北
県岐阜商 9—3 大垣南

▽同準決勝
大垣農 15（延）14 岐阜北
県岐阜商 13—9 市岐阜商

▽同決勝
県岐阜商 12（6—5、6—6）11 大垣農

▽女子準々決勝
岐阜南 11—2 大垣農
加納 不戦勝 大垣北
県岐阜商 11（延）9 高山
養老女 10—3 富田女

▽同準決勝
岐阜南 10—5 加納
県岐阜商 10—7 養老女

▽同決勝
岐阜南 6（4—1、2—2）3 県岐阜商

氷見ク、想球会に敗る

▼第14回富山県室内選手権（2月富山市体育館）

▽一般男子1回戦（2試合）
H・H・C 15—10 八尾ク
富山想球会 18—10 富山大

▽同準決勝
氷見ク 20—12 H・H・C
富山想球会 12—11 氷見クB

▽同決勝
富山想球会 15（4—8、11—4）12 氷見ク

▽高校男子準々決勝
氷見 18—4 八尾
富山北 13—6 雄山
日大高岡 10—2 富山商
高岡商 8—4 二上

▽同準決勝
氷見 27—5 富山北
日大高岡 16—10 高岡商

▽同決勝
日大高岡 14（7—4、7—5）9 氷見

▽同女子準々決勝
有磯 18—0 高岡
富山女 8—3 清光
小杉 13—2 高岡商
高岡女 16—6 富山北

▽同準決勝
有磯 16—2 富山女
小杉 4（延）3 高岡女

▽同決勝
小杉 5（2—2、3—2）4 有磯

大同製鋼、独走の15連覇

▼第32回愛知実業団リーグ（2月名古屋市体育館）

▽男子1部
日本碍子 18—14 トヨタ車体
大同製鋼 28—13 新日鉄名古屋
トヨタ車体 25—3 トヨタ自工
大同星崎 28—9 トヨタ自工
トヨタ車体 26—10 日本碍子
新日鉄名古屋 22—11 日本碍子
大同星崎 21—14 トヨタ車体
大同製鋼 34—10 トヨタ自工
大同星崎 24—18 日本碍子
トヨタ車体 26—13 新日鉄名古屋
大同星崎 20—12 新日鉄名古屋
大同製鋼 27—17 トヨタ車体
大同製鋼 33—16 日本碍子
トヨタ自工 17—14 新日鉄名古屋
大同製鋼 21—16 大同星崎

【順位】①大同製鋼＝15回連続、通算17度目の優勝②大同星崎③トヨタ車体④新日鉄名古屋⑤日本碍子⑥トヨタ自工（4〜6位は得失点差による）

▽同2部7・8位決定戦
中部電力 23—8 トーメン

▽同5・6位決定戦
三菱重工 20—9 パイロット

▽同3・4位決定戦
アイシン精機 14—11 豊田工機

▽同1・2位決定戦
ブラザー工業 16—8 豊田織機

▽同1・2部入れ替え戦
トヨタ自工（1部）12—10 ブラザー工業（2部）

▽女子（2回戦制）
ブラザー工業 19—1 伏原紡織
ブラザー工業 20—2 伏原紡織

男子は沖縄工が初

▼第10回沖縄県高校新人大会（2月奥武山体育館）

▽男子準々決勝
前原 14—4 那覇工
沖縄工 16—8 北山
首里 10—8 浦添
興南 18—11 コザ

▽同準決勝
沖縄工 12—7 首里
前原 12—11 興南

▽同決勝
沖縄工 9（6—4、3—4）8 前原

▽女子準々決勝
興南 11—1 那覇
小禄 10—2 コザ
那覇商 11—6 読谷
浦添 13（延）11 北山

▽同準決勝
浦添 7—4 興南
小禄 5—3 那覇商

▽同決勝
小禄 8（3—3、5—2）5 浦添

▼熊本県総合選手権（1月、熊本市体育館）

▽男子Aブロック準々決勝
熊城会 20—13 本渡ク
水俣ク 16—6 済々黌高
熊城会B 18—7 江原会
全熊本一工 12—5 九州学院高

▽同準決勝
熊城会 10—8 水俣ク
全熊本一工 15—9 熊城会B

▽同決勝
熊城会 11（5—7、6—2）9 全熊本一工

▽女子準決勝
水俣ク 10—5 熊本女商高
熊本市高 6—2 熊本市高OB

▽同決勝
熊本市高 11（6—1、5—2）3 水俣ク

編集後記

□……23頁でも触れていますが日本×イスラエル戦に関する読者の投稿は、〆切り（3月20日）までにわずか2通。ユーゴ戦や東ドイツ戦終了後に寄せられたあの〃活気〃はありませんでした。
事態の異常さが、読者各位に批判する気持ちさえも失はせてしまったのでしょうか。

□……本音を云えば、編集子にとって、今回のような出事ごとに対して、読者からの投書が積みあげられるより、競技そのもの、普及活動などへご意見が寄せられるほうが嬉しいのです。
その意味で、本誌読者の「健全さ」をうかがい知れたともいえました。

□……各地で、年1〜2回の計画で、機関誌、会報の刊行がさかんになりました。全日本実連も準備中と聞きます。
本誌にとって、姉妹誌ができるのは望ましいことですし、競争誌になって欲しいとさえ思ってます。
現実に「ハンドボール・くまもと」創刊号に掲載された「あなたのチームが勝つためには」などは、本誌がつねに考えながら手がつかずにいた企画です。
各誌の発展を祈ります。

□……早ければ来号から新スタッフとなります。（S）

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一二九号
昭和四十年六月七日第三種郵便物認可
昭和五〇年三月二十五日印刷 発行所 渋谷区神南一ー一ー一 大代表(467)三一一一 振替 東京五八三四八番
昭和五〇年四月一日発行 日本ハンドボール協会
編集兼発行人 保坂周助
定価二百五十円(年間購読料二千五百円)